

日本ルワンダ学生会議  
第9回本会議  
活動報告書

2013年2月12日～3月1日



## はじめに

本日は私たちの活動報告書を手にとって下さり、ありがとうございます。今回の渡航実現にあたり、準備の段階から多くの人に協力していただきました。日頃より私たちの活動を応援して下さる皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

1994年に起こったジェノサイド以降、ルワンダという国をジェノサイド関連の映画や、学校の教科書などで知った方もいるかと思います。私たちメンバーの多くが《ジェノサイド》を通じてルワンダについて知りました。しかし、現在のルワンダは、私たちが想像していた国とは全く違ったのです。首都では忙しなく行きかう人々を見かけ、ビルの建設も進み、人々はみな「発展、発展」と開発への期待を口にしていました。一方で、農村地域との生活レベルの差や車の排気ガスによる大気汚染など、新たな社会問題も抱えています。もはや、ルワンダ＝ジェノサイドではありませんでした。

遠く離れた国、ルワンダの学生と共に活動していくなかで、知ることの重要性に気が付きました。知らないから誤解してしまう、喧嘩してしまう、不安になる。今回の渡航を通してさらに痛感したことでもあります。

私たちはルワンダで起きたジェノサイドという事実や急成長を遂げている現在のルワンダと向き合い、同時に日本のみなさまにルワンダをもっと知ってもらいたいという願いを持って、活動しております。今回私たちが出会ったルワンダや、現地で考えたことをこの報告書を通じてみなさまに伝えることができれば幸いです。

日本ルワンダ学生会議は、今回の渡航経験を糧に今後も「相互理解」という活動理念の下、ルワンダメンバーと共に日々精進してゆきます。私たちのこれからの活動に、どうぞご期待ください。それでは、最後までお楽しみください。

2013年4月

日本ルワンダ学生会議 第9回本会議 渡航コーディネーター

小坂弘奈

# 日本ルワンダ学生会議 第9回本会議活動報告書

## <目次>

はじめに	3
------	---

### 【序章】

---

関係者挨拶	8
日本ルワンダ学生会議団体紹介	9
ルワンダ共和国基礎情報	11

### 【第一章】 第9回本会議 事業概要

---

第9回本会議 概要	16
第9回本会議 活動日程	17

### 【第二章】 学生会議 活動報告

---

概要・議題	20
日本側からのプレゼンテーション	
1. 日本の高度経済成長	21
2. 武士道	24
3. 東日本大震災後の子ども支援	26
4. 紛争と人道的介入	28
ルワンダ側からのプレゼンテーション	
1. Food security in Rwanda	32
2. Who can be classified as a HERO?	34
3. AGACIRO Development Fund	38
4. Contribution of gender in the development of countries	40

### 【第三章】 ルワンダ現地 活動報告

---

1. JICA 事業	44
2. ジェノサイドメモリアル訪問・インタビュー	48
3. アイスクリーム店 (Inzizi Nziza)	58
4. PIASS	66

5. 教会	68
6. King's Palace	70
7. ピースコンサート	72
8. ホームステイ	74

## 【第四章】参加者感想

---

小坂 弘奈	フェリス女学院大学国際交流学部 2年	86
白川 千尋	専修大学法学部 2年	88
谷川 琴乃	早稲田大学政治経済学部 2年	91
松本 万里子	立命館大学経済学部 2年	94

## 付録

---

### コラム

小坂スイミングスクール	18
カガメ大統領	23
ユジンのお腹	31
恋バナ in ルワンダ	37
命名 in ルワンダ	42
定員オーバー	79
THE accident happened in カリオペ家	84
仕事しろよ、ルワンディーズ	96
ムニャカジ	97
PHOTO ALBUM	98
会計報告	100
おわりに	101



# 序章

---

関係者挨拶	8
日本ルワンダ学生会議団体紹介	9
ルワンダ共和国基礎情報	11

## 関係者挨拶

第二次世界大戦から 20 年が過ぎたころ、高度経済成長期に入った日本では、時の首相が「もはや戦後ではない」と言った。ルワンダで 1994 年に起きたジェノサイドも今年（2013 年）で 19 年になる。ルワンダもまた「戦後ではない」時期に入りつつあるのだろう。

この 19 年間、ジェノサイドを鎮圧した新政権は、治安回復、経済成長、ICT の振興がすみ、国際航空便の増加で世界の人々との往来も増した。「ルワンダ＝ジェノサイド」という見方は、急速に過去のものとなりつつある。

高度経済成長期の日本では「戦争を知らない子どもたち」というフォークソングが流行したが、同じようにルワンダでもジェノサイドは「歴史」になりつつあり、ルワンダの大学生世代もジェノサイドの記憶が薄い「ポスト・ジェノサイド・ジェネレーション」が増えていこう。

したがって、日本とルワンダの大学生世代の交流もまた、徐々に変化していくことだろう。それでも大学生だからこそできる、お互いの国が抱えている社会問題を共に真摯に考え、共有し、共感できる人間になってもらいたいし、JRYC の今後の活動にも期待したい。

小峯茂嗣  
WAVOC 客員教員



# 日本ルワンダ学生会議 団体紹介

## <略歴>

2005年10月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が主催するスタディーツアーの形でルワンダ・プロジェクトがスタート
2008年9月	ルワンダにて第1回本会議を開催
2009年3月	団体名をルワンダ・プロジェクトから日本ルワンダ学生会議に改称
同年9月	ルワンダにて第2回本会議を開催
同年12月	日本にて第3回本会議を開催
2010年1月	日本ルワンダ学生会議関西支部発足
同年8月	ルワンダにて第4回本会議を開催
同年12月	日本にて第5回本会議を開催
2011年8月	ルワンダにて第6回本会議を開催
同年12月	日本にて第7回本会議を開催
2012年8月	日本にて第8回本会議を開催
2013年2月	ルワンダにて第9回本会議を開催

## <主な活動内容>

- ・ ルワンダへの渡航
- ・ 日本への招致
- ・ 週1回の定期ミーティングの開催
- ・ 勉強会
- ・ 講演会の開催
- ・ 報告会の開催
- ・ 報告書の作成
- ・ 各種イベントへの参加

## <構成人数> (2013年3月現在)

日本側メンバー23名、ルワンダ側メンバー21名

## <活動理念>

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には次のような言葉が書かれています。  
「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり返って発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と

交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの‘Never again’に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまった。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

#### <団体理念の継承>

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保する。ユネスコ憲章には以下のような文言がある。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならぬ神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表れてしまった。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流している。実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えている。この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意していただくものとする。

#### <公認>

- ・ 駐日本ルワンダ共和国大使館
- ・ アフリカ平和再建委員会（ARC） 小峯茂嗣
- ・ 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

#### <連絡先>

メールアドレス：[japan.rwanda@gmail.com](mailto:japan.rwanda@gmail.com)

ホームページ：<http://jp-rw.jimdo.com/>

# ルワンダ共和国基礎情報

(外務省ホームページより引用 2012年11月現在)

正式名称：ルワンダ共和国 (Republic of Rwanda)

## 一般事情

### 1.面積

2.63 万平方キロメートル

### 2.人口

1,090 万人 (2011 年, UNFPA)

### 3.首都

キガリ

### 4.言語

キニアルワンダ語, 英語, 仏語

### 5.宗教

カトリック 57%, プロテスタント 26%, アドヴェンティスト 11%, イスラム教 4.6%等

### 6.略史

年月	略史
17 世紀	ルワンダ王国建国
1889 年	ドイツ保護領 (第一次大戦後はベルギーの信託統治領)
1961 年	王政に関する国民投票 (共和制樹立を承認) 議会がカイバンダを大統領に選出
1962 年	ベルギーより独立
1973 年	クーデター (ハビヤリマナ少将が大統領就任)
1990 年 10 月	ルワンダ愛国戦線 (RPF) による北部侵攻
1993 年 8 月	アルーシャ和平合意
1994 年 4 月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに 「ルワンダ大虐殺」発生 (~1994 年 6 月)
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線 (RPF) が全土を完全制圧, 新政権樹立 (ビジムング大統領, カガメ副大統領就任)
2000 年 3 月	ビジムング大統領辞任
2000 年 4 月	カガメ副大統領が大統領に就任
2003 年 8 月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003 年 9-10 月	上院・下院議員選挙 (与党 RPF の勝利)
2008 年 9 月	下院議員選挙 (与党 RPF の勝利)
2010 年 8 月	カガメ大統領再選

## 政治体制・内政

### 1.政体

共和制

### 2.元首

ポール・カガメ大統領

### 3.議会

上院（26 議席），下院（80 議席）

### 4.政府

(1) 首相 ピエール・ダミアン・ハバムレミ (Rt. Hon. Pierre Damien HABUMUREMYI)

(2) 外相 ルイーズ・ムシキワボ (Hon. Louise MUSHIKIWABO)

### 5.内政

1962 年の独立以前より，フツ族（全人口の 85%）とツチ族（同 14%）の抗争が繰り返されていたが，独立後多数派のフツ族が政権を掌握し，少数派のツチ族を迫害する事件が度々発生していた。1990 年に独立前後からウガンダに避難していたツチ族が主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し，フツ族政権との間で内戦が勃発した。1993 年 8 月にアルーシャ和平合意が成立し，右合意を受け，国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが，1994 年 4 月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に，フツ族過激派によるツチ族及びフツ族穏健派の大虐殺が始まり，同年 6 月までの 3 ヶ月間に犠牲者は 80～100 万人に達した。

1994 年 7 月，ルワンダ愛国戦線がフツ族過激派を武力で打倒すると，ビジムング大統領（フツ族），カガメ副大統領による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと，出身部族を示す身分証明書の廃止（1994 年），遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999 年），国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999 年）等，国民融和・和解のための努力を行っている。

1999 年 3 月には，1994 年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施，2001 年 3 月には市町村レベル選挙を実施，2003 年 8 月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。同年 9，10 月の上院・下院議員選挙及び 2008 年 9 月の下院議員選挙では与党 RPF が勝利した。

カガメ大統領（2010 年の大統領選挙で再選）は汚職対策に力を入れており，他のアフリカ諸国に比して，汚職の少なさ，治安の良さは特筆される。

## 外交・国防

### 1.外交基本方針

従来非同盟中立主義が基本路線。冷戦時代は東西両陣営と友好関係を維持，現在は，経済開発のため先進諸国との協力を重点を置く。東アフリカ共同体（EAC）及び東南部アフリカ共同市場（COMESA）メンバー。コモンウェルス加盟（2009 年 11 月）。

### 2.軍事力

- (1) 予算 7,300 万ドル (2011 年)
- (2) 兵役 志願制
- (3) 兵力 3 万 3,000 人 (2011 年)

## 経済

### 1.主要産業

農業 (コーヒー, 茶等)

### 2.GDP

63.8 億ドル (2011 年)

### 3.一人当たり GNI

570 ドル (2011 年)

### 4.経済成長率

8.6% (2011 年)

### 5.物価上昇率

5.7% (2011 年)

### 6.総貿易額

- (1) 輸出 297 百万ドル (2010 年)
- (2) 輸入 1,084 百万ドル (2010 年)

### 7.主要貿易品目 (2010 年)

- (1) 輸出 コーヒー, 茶, 錫, コルタン
- (2) 輸入 消費財, 資本財, 中間財, エネルギー財

### 8.主要貿易相手国 (2011 年)

- (1) 輸出 ケニア, 中国, コンゴ民主共和国, マレーシア
- (2) 輸入 ケニア, ウガンダ, 米国, アラブ首長国連邦

### 9.通貨

ルワンダ・フラン

### 10.為替レート

1 ドル=602 ルワンダ・フラン (2012 年)

### 11.経済概況

(1) 農林漁業が GDP の 3 割以上, 労働人口の約 9 割を占め, 多くの農民が小規模農地を所有。主要作物はコーヒー及び茶 (輸出収入の約 4 割) であり, 高品質化により国際競争力を強化する政策をとっている。一方で, 内陸国のために輸送費が高いという問題も抱える。

(2) 1980 年代は, 構造調整計画を実施し経済の再建に努めたが, 内戦勃発以降はマイナス成長, 特に 1994 年の大虐殺で更に壊滅的打撃を受けた。その後, 農業生産の堅実な回復 (1998 年には内戦前の水準を回復), ドナー国からの援助, 健全な経済政策により 1999 年までに GDP は内戦前の水準に回復した。

(3) ルワンダ政府は、1996年に「公共投資計画」を、2000年に20年後の経済達成目標を定める「VISION2020」を、2002年には「貧困削減戦略文書完全版(F-PRSP)」を、また、2007年には、第2次世代PRSPとなる経済開発貧困削減戦略(EDPRS)を策定し、これら戦略等を基軸とした経済政策を実施している。2000年12月には、拡大HIPCイニシアティブの決定時点に達し、2005年4月に完了時点に到達している。

(4) カガメ大統領は、汚職対策にも力を入れており、世銀等からの評価も高い。

## 経済協力

### 1.日本の援助実績

- (1) 有償資金協力(2010年度まで, EN ベース) 46.49 億円
- (2) 無償資金協力(2010年度まで, EN ベース) 371.75 億円
- (3) 技術協力実績(2010年度まで, JICA ベース) 68.44 億円

### 2.主要援助国(2009年)

- (1) 米国 (2) 英国 (3) ベルギー (4) オランダ (5) ドイツ

## 二国間関係

### 1.政治関係

(1) 日本は、ルワンダが独立した1962年7月に国家承認。2009年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010年1月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは1979年5月に在京大使館を開設。2000年9月に閉鎖したが、2005年1月に再開。

(2) 1994年4~6月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年9~12月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国(当時、現コンゴ民主共和国)のゴマ等に約400名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。

### 2.経済関係(対日貿易)

#### (1) 貿易額

輸出 1億900万円(2011年)

輸入 6億8,400万円(2011年)

#### (2) 主要品目

輸出 コーヒー, 雑貨

輸入 自動車, 二輪, 医療関連機械

### 3.文化関係

国営テレビ局に対し番組ソフトを供与。

### 4.在留邦人数

95人(2011年10月現在)

### 5.在日当該国人数

30人(2011年)

# 第一章

---

## 第9回本会議 事業概要

第9回本会議 概要	16
第9回本会議 活動日程	17

## 第9回本会議 概要

### 【開催時期】

2013年2月12日（火）～3月1日（金）

### 【開催場所】

ルワンダ共和国（キガリ、ブタレ、ギコンゴロ）

### 【開催目的】

1. 学生が主体となった、市民レベルでの友好交流により二国間関係を強化する。
2. 学生会議やフィールドワークを通して、両国学生がお互いの国の歴史や社会的・政治的・経済的状況を知り、両国についての多面的理解を促進させる。
3. お互いの国の社会問題に対して理解を深め共に考えることで、解決策を模索し、主体的に行動できる人材を育むきっかけを作る。
4. 報告書・ドキュメンタリー映像の作成や報告会の開催を通して、我々が学んできたことをより多くの人々に伝える。

### 【協力】

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)

ルワンダ国立大学(National University of Rwanda, NUR)

在ルワンダ日本大使館

駐日ルワンダ共和国大使館



## 第9回本会議 活動日程

実施日	実施内容	実施場所
2月12日(火)	日本出発	成田空港
2月13日(水)	ルワンダ到着	キガリ国際空港
2月14日(木)	在ルワンダ日本大使館訪問	キガリ
	キガリジェノサイドメモリアル見学	
	ホームステイ	
2月15日(金)	JICA 事業見学	キガリ
	ブタレへ移動	ブタレ
2月16日(土)	プール	ブタレ
2月17日(日)	教会見学	ルワンダ国立大学 (ブタレ)
2月18日(月)	ムランビジェノサイドメモリアル見学	ギコンゴロ
	コンサートリハーサル見学	ルワンダ国立大学 (ブタレ)
2月19日(火)	King's Palace 見学	ブタレ
2月20日(水)	学生会議	ルワンダ国立大学 (ブタレ)
	アイスクリーム店にてインタビュー	ブタレ
	PIASS の学生と交流	
2月21日(木)	休日	ブタレ
2月22日(金)	ピースコンサート開催・出演	ルワンダ国立大学 (ブタレ)
2月23日(土)	結婚式訪問	ブタレ
2月24日(日)	学生会議	ルワンダ国立大学 (ブタレ)
2月25日(月)	リフレクション	ルワンダ国立大学 (ブタレ)
2月26日(火)	キガリへ移動	キガリ
	ホームステイ	
2月27日(水)	買い物	キガリ
2月28日(木)	ルワンダ出発	キガリ国際空港
3月1日(金)	日本到着	成田空港

## コラム 小坂スイミングスクール

2月16日、私は日本ルワンダ学生会議史上初のルワンダのプールに入った女になった。どうやらルワンダンは我々が渡航するとなぜかプールに連れて行きたがるらしいのだが、去年のメンバーも、今年の私以外の渡航メンバーも、ルワンダのプールに入って、もし口の中に水が入ったりなんかしたら病気になるのではないかと…という恐怖心から、いつも水着を持ってきていないなど、適当な理由をつけて断っていた。しかし、私は暑さを我慢することができなかった。いざプールに入ってみると塩素消毒もしているようだし意外といけそうぞ…ということで思い切り楽しんだ。

最初のうちはぷかぷか浮かんだり水をかけあったりして遊んでいたのだが、しばらくして私はあることに気が付いた。そこにいたほとんどのルワンダ人が、凄まじく泳ぎが下手くそだったのだ。泳いでいるというよりは、溺れていると言った方がいいのではないかと思う程である。

中でも Jackson は全く泳げないらしく、みんなが楽しそうに溺れているなか、ひとりポツンと離れたところから眺めているだけであった。見るに忍びなくなった私は彼にクロールを教えることにしたのだが、なんと彼は水に浮くことすらできなかった。当然まずは体を浮かせることからはじめ、バタ足、息継ぎ、手と足の動かし方を順に1時間ほどレクチャーした。私は寒くなり途中で水から上がったのだが、それでも彼は練習を続ける。その姿はまさに一生懸命。それからだいぶ時間が経ち、そろそろ帰ろうかという雰囲気になったころ、彼の泳ぎは決して上手とは言えないが、確実に上達していた。よくがんばったね。私は息子が初めて浮き輪なしで泳ぐことが出来た母親のような気持ちになった。白川曰く、その瞬間私と Jackson の師弟関係が確立されたようだ。ともあれ、私は次に彼に会うときにはクロールをマスターしていると信じている。ちなみに彼の座右の銘は Nothing is Impossible (不可能なことはない) である。

(小坂)



# 第二章

---

## 学生会議 活動報告

概要・議題	20
日本側からのプレゼンテーション	
1. 日本の高度経済成長	21
2. 武士道	24
3. 東日本大震災後の子ども支援	26
4. 紛争と人道的介入	28
ルワンダ側からのプレゼンテーション	
1. Food security in Rwanda	32
2. Who can be classified as a HERO?	34
3. AGACIRO Development Fund	38
4. Contribution of gender in the development of countries	40

# 学生会議 議題・概要

---

実施日：2013年2月20日、24日

## 活動内容

日本・ルワンダ両国の学生がそれぞれの興味のある分野や社会問題などからトピックを決め、プレゼンテーションを行い、質疑応答やディスカッションを行う。

## 活動目的

団体の基本理念である相互理解を念頭に、同じ学生という対等な立場から、さまざまなテーマについて深く考え、互いの意見を尊重しつつディスカッションをすることで、互いの国についてより理解を深める。

## 成果

- ・互いの国についての理解がより深まった。
- ・異なる背景を持っている相手との議論で、違う価値観・視点からの意見と出会った。
- ・自分の国を客観的に、新たな視点で見ることができた。

## 反省

- ・全体スケジュールの急な変更により、ルワンダ側の発表が予定より減ってしまった。
- ・曜日や時間帯により参加人数が少ないことがあった。
- ・開始時刻の遅れ。
- ・ディスカッションの進め方に改善点あり。

## 学生会議トピック（発表者）

### 20日

1. Food security in Rwanda (Valence)
2. 日本の高度経済成長（松本万里子）
3. Who can be classified as a HERO? (Blaise)
4. 武士道（白川千尋）

### 24日

5. 東日本大震災後の子ども支援（谷川琴乃）
6. AGACIRO Development Fund (Eugene)
7. 紛争と人道的介入（小坂弘奈）
8. Contribution of gender in the development of countries (Nadine)

# 日本側からのプレゼンテーション

---

## 日本の高度経済成長

発表者：松本 万里子

日時：2月20日（水）10:10～10:40

参加者：小坂、白川、谷川、Eugene, Fils, Kizito, Cynthia, Blaise, Jean de Dieu, Ephrem, Aline, Valence Muvura,

### ■プレゼン要旨

今から約60年前、日本で高度経済成長が起きた。人々はアメリカの生活様式に憧れを抱き、それに近づけるよう努力し、結果として日本独自の発展を遂げた。しかし、この経済成長では、平均寿命の伸びといった正の影響だけではなく、公害といった負の影響ももたらした。経済成長による正負の影響を紹介するとともに、現在の日本経済の状況も紹介した。

### ■プレゼン詳細

【テーマを選んだ理由】現在ルワンダでは、急速な経済発展が起きている。一方、日本では約60年前、高度経済成長が起きた。ルワンダと日本における経済成長の違いは何だろうかと疑問に思い、経済成長をプレゼンのテーマとすることに決めた。また、国の経済成長や発展・開発について、ルワンダがどう考えているのか知りたいと思い、このテーマを選択した。

【プレゼンの展開】このプレゼンでは、高度経済成長が起きた理由・原因・影響・日本経済の現状という、大きく4つに分けて発表した。経済成長における正負の影響を示した上で、改めて国の発展を望むかどうか質問した。さらに、ルワンダはどのように発展すべきだと思うかを質問した。

### ■質疑応答

Q.今の日本経済では、GDPの成長率が伸び悩んでいるが、政府はどんな対策をしているか。

A.公共投資をしたり、海外へ日本の製品を輸出したりして、GDP成長率の回復を目指している。

Q.ユーロ危機に対する日本政府の政策は何か。

A.今、日本政府は東日本大震災の復興に重点をおいて政策を立てているので、ユーロ危機に重点をおいた、特別な政策はないと思われる。

Q.インターネットのニュースで、日本が中国にGDP成長率で負けたと知ったが、それに対する政策は何か。

A.日本は中国と GDP 成長率で競い合っているわけではないが、危機感を感じている。政策としては、経済の低迷を打破するために、他国との経済連携協定を結ぶ交渉をしている。

## ■ディスカッション

### 【テーマ】

- ①ルワンダ国に発展してほしいと思うかどうか。またそう考える理由は何か。
- ②国が発展するためにはあなた自身もしくはルワンダ国は、何をすべきだと考えるか。

### 【結論】

- ①全員一致で、発展を望む。発展により、正負の影響があったとしても、正の影響のほうが大きければ、発展すべきだ。発展することで、政府は国民にさまざまな公共サービスを提供することができる。さらに、貧しい国民も救うことができる。
- ②発展に必要なことは、持続性であり、政府は持続的な発展をすべきである。社会的・経済的・環境的側面から発展を考える必要がある。

### 【日本人メンバーからの提言】

日本はこれまで、公害や原発問題など様々な問題を経験してきた。これから発展を遂げていくルワンダには、日本の経験を参考にしながら、発展に潜むリスクについても、しっかり考えてほしい。

## ■感想

【発表者感想】このプレゼンで、国の政策を聞かれるとは、全く予想していなかった。私は、日本の高度経済成長という事実を通じて、発展における正負の側面を知ってもらい、改めて国の発展ということを考えてもらいたかった。しかし、ルワンダは、発展は人々にとって良いことであり、このことは再考する必要がないといった考えであった。国の政策を知り、政府がどのように動いているのかがということを、重要視しているように感じた。また、彼らは発展における良い面しか考えていないように見え、私はそのことに不安を感じた。しかし、最後に発展におけるリスクも考えるべきという私が一番伝えたかったことを、伝えることができたので、良かった。これからも、ルワンダの発展に注目していきたいと思う。(松本)

【参加者感想】発展するときは、その弊害である公害に注意しなければいけないことは僕も同意する。でもここで薬を例に出したい。薬の効用のほうが副作用より大きいなら薬を飲むし、副作用が大きければ薬を服用するのをやめる。これと同じように、発展によるメリットがデメリットよりも大きいならもちろん発展したいが、発展によるデメリットがメリットより大きいなら、発展を止めて環境を守るほうを選ぶ。今のルワンダは、メリットがデメリットより大きいと思うので、発展すべきだ。それは、今のルワンダの状況では、発展しないと最も貧しい人々を救うことができないからだ。(Jean de Dieu 谷川訳)

## コラム カガメ大統領

キングズパレス（歴史博物館）に向かうバスの中、突然車内の人々が何やら興奮した様子でざわめきだした。彼らはキニヤルワンダ語で話しているため私たちは当然意味がわからない。すると私たちのバスのすぐ脇を猛スピードで通り過ぎる数台のカッコイイ車。その車が過ぎるとバスは何事もなかったかのようにまた動き出した。ルワンダメンバーに聞くと、なんと今すれ違った車にはカガメ大統領が乗っていたのだ！！ルワンダは日本の四国より少し大きいくらいの面積の小さい国だが、まさかカガメ大統領とすれ違うとは私たちも驚いた。それにしてもカガメ大統領の乗っていた車、レーシングカーかと思う勢いでスピードを出していた。ルワンダ人の運転は日本とは違いかなり荒い。バスに乗っているのも不安になる。

ルワンダの人々は本当にカガメ大統領が大好きである。私たちが宿泊したホテルにも、ホームステイ先にも、学校にも、レストランにも彼の写真が飾られていた。余談だが、渡航前ある噂を聞いた。ルワンダ人は牛乳が大好きで、ことあるごとに我々に牛乳をすすめてくるのだが（腹を下すことを恐れて私たちは飲むのを控えていた）、それはカガメ大統領が牛乳好きだからという噂だ。ルワンダメンバーにその真相を聞くと、さすがにそれは単なる噂らしい。ちなみにルワンダ人はおなかがいたくなると牛乳を飲むそうだ。

この出来事から、カガメ大統領がルワンダの多くの人から好かれているということがわかったのだが、話はこれだけでは終わらなかった。帰国の数日前、キガリ市内をバスで移動している途中、なんとまた私たちの乗るバスのすぐ近くをカガメ大統領が通り過ぎたのだ。これはもう運命としか思えない。カガメ運。運命の人…？一国の大統領と二度もすれ違ったことは、私たちにとって、ある意味一番衝撃的な思い出になった。 （小坂）



カガメ大統領

（写真：在日ルワンダ大使館より）

# 武士道

発表者：白川 千尋

日時：2月20日（水）14:35～15:10

参加者：小坂、谷川、松本、Alex, Blaise, Eugene, Kizito, Valence Muvara

## ■プレゼン要旨

武士道は日本固有のものであり、武士の掟のことを意味していた。仏教が日本に広まり、神道も広く信仰されるようになった頃、それらは武士（侍）に重要な要素を与えた。例えばそれは、瞑想や禅、目上の人や先祖に対する尊敬、君主に対する忠誠などである。さらに武士の命でもある刀と武士の関係を説明し、刀を原型として発展し、武士道を体現化した武道である剣道の紹介も行った。日本の美德や道徳をルワンダ人に紹介し、精神的な面からルワンダ人と日本人の考え方の違いを知ることが本プレゼンの目的である。

## ■プレゼン詳細

武士は騎士や侍と言い換えることができ、道（どう）は守るべきもの、規則を意味する。つまり、武士道とは武士、騎士そして侍の掟とすることができる。もともと、武士道は武士という階級にのみ付される掟であったが、しだいに下層階級から上層階級の人々の間にも広がっていった。現在われわれ日本人が知っている武士道は仏教と神道の影響を受けたものである。仏教は武士に瞑想や禅といった要素を与え、神道は武士に親や先祖に対する尊敬と君主に対する忠誠心といった要素を与えた。仏教と神道から与えられた要素と武士の掟が混ざり合い、武士道は道徳そのものとなる。その道徳とは、義・勇・仁・礼・誠・(名誉)・忠義である。

次に刀についての紹介をした。刀は力・勇気・中世と名誉の象徴であり、武士の命でもある。また武士に尊厳と責任を与えた。ゆえに、刀を侮辱することはその所有者である武士を侮辱することと同義である。つづいて刀を原型として発展し、武士道を体現化した剣道についてふれ、剣道がどういうものを映像を用いて紹介した。

武士、侍は現代社会には存在しておらず、武士道精神は日本人の中からほとんど消えてしまったが、完全に消えたわけではない。礼儀を重んじる日本人の姿勢は今でも残っており、剣道といった武道にも武士道は生きている。

## ■感想

【発表者感想】 今回の学生会議で私は日本の文化紹介をしたいと思いテーマを武士道にした。文化紹介だけのプレゼンをしようと思った理由に、例年の学生会議では、日本メンバーはあまり日本の文化を扱ったプレゼンをしないというのも一つにあったが、礼儀といっ



た美しい作法やご先祖様を大事にする心といった日本人の美德や価値観をルワンダ人に知ってほしかったというのが一番の理由である。武士道は道徳や価値観といった抽象的で分かりにくいテーマなので、武士道を体現化した剣道の紹介をすることで分かりやすくし、同時に日本固有のスポーツを知ってもらおうと思った。わたしが8年間剣道をやっていたというもあり、実際にルワンダ人を相手にミニ竹刀を使って実演もした（実演してくれとふられた）。プレゼンを終えた後に、一人のルワンダンから「ぜひ剣道をルワンダにも広めてくれ！僕は剣道を好きになったよ！」と言われて嬉しかった。知ってもらっただけでよかったが、「ルワンダにもきっと需要はある」といわれるほど興味をもってくれたので、このプレゼンをやった甲斐はあったと思うことができた。（白川）

#### 【参加者感想】

・義・勇・仁といった日本人の精神や価値観を知ることによって日本を理解する手がかりを得ることができた。剣道はとてもおもしろいスポーツであると思うし、特に“つき”という技はプレイヤーに相当なダメージを与えることができると感じた。（Alex 白川訳）

・武士道を知ることができてよかった。特に剣道が大変気に入った。ぜひ、ルワンダで剣道を広めてほしい。（Blaise 白川訳）



剣道の実演（左：Blaise、右：発表者）

## 東日本大震災後の子ども支援

発表者：谷川 琴乃

日時：2月24日（日）10:50～11:20

参加者：小坂、白川、松本、Eugene, Jackson, Valence Muvura, Valence Nsengiyumva,

### ■プレゼン要旨

東日本大震災は、子どもにも大きな被害をもたらした。避難先でたまるストレス、家族を亡くしたトラウマ、目に見えない放射能への恐怖・・・東日本大震災から2年が経つ今も問題は解決していない。被災した子どもが置かれている現状と、彼らを支援するための具体的な取り組みを紹介した。震災から約2年経とうとするこの時期に被災地についてプレゼンテーションすることで、もう一度思い出し、忘れないでほしいという思いで発表した。

### ■プレゼン詳細

2011年3月11日、東北地方をマグニチュード9.0の地震が襲い、その約1時間後に到達した津波により約15000人もの命が失われた。さらに、津波によって片親または両親を亡くした子どもは1580人に上ると報道されている。ここで、震災遺児の状況をイメージしやすくするため、遺児が書いた作文を引用した。また、震災によって引き起こされたもう一つの問題は、原子力発電所事故である。除染作業は現在も続いており、原発周辺に住んでいた人の中には未だに帰れない住民も多い。復興は進んでいるのだろうか。前回の本会議でルワンダ人4名とともに訪ねた岩手県陸前高田市市長である戸羽太氏の言葉を引用して、完全な復興には程遠いという状況を伝えた。

被災した子どもたちはどのような状況に置かれているのか。例えば原発のある福島県の子どもが直面している問題は、運動不足による肥満、ストレス、家族や友達を亡くしたことからくるトラウマなどが挙げられる。こうした子どもたちにどのような支援がなされているのか。まず、NPOや政府機関などが、福島の子どものために外で安心して遊べる場所を提供することで、運動不足解消やストレス軽減に貢献している。次に、金銭的支援である。例えばあしなが育英会は、親を津波で亡くした子どもに200万円を提供している。また、同じ境遇にある子どもと交流する場を設けることで、精神的支援も行っている。さらに、NPOが主体となって子どもへの学習支援もなされている。大学生がボランティアとして登録し、被災した子どもたちに無料で勉強を教える取り組みは、多数の団体が行っている。

このように、子どもたちの震災後のストレス、トラウマを軽減する精神的支援、学習支援、遺児への金銭的支援など、さまざまな支援がなされている。しかし、未だ支援は十分であるとは言い難い。また、物質的復興がなされたとしても、心の復興はさらに難しい。今後の復興を担っていく子どもの心のケアは重要な課題である。

プレゼンテーションの最後に、誰かが見てくれていると思うとがんばれるという戸羽市長の言葉を引用し、被災地を忘れないでほしいというメッセージを伝えた。被災した子どもたちに私たちは何ができるだろうか。募金をしたり、学習支援をしたりできるかもしれないが、それを私たち全員ができるとは限らない。すべての人ができることは、被災地のことを忘れないこと、心にとどめ、思い出すことである。

## ■質疑応答

Q. 町を津波から守るためのものはあるか？(Valence Nsengiyumva)

A. 海岸に防波堤があったが、今回の津波は高すぎてそれを乗り越えてしまったり、防波堤自体を壊してしまったりして町に流れ込んだため、甚大な被害が出た。

Q. なぜ危険な放射能を含む原発を建てたのか？(Valence Muvura)

A. 他の資源よりもコストが低いという理由でアメリカから原発を導入することを決定した。

Q. 日本で 3.11 を皆で思い起こすための日はあるか？(Jackson)

A. 去年の 3 月 11 日は追悼式が行われ、テレビや新聞などのメディアも震災や復興について大きく報道した。

## ■感想

【発表者感想】この議題ではディスカッションを設けなかったのが盛り上がりには欠けたが、まだ復興には長い時間がかかるという現状や、支援の具体的な取り組みを伝えることができたので良かったと思う。この発表では支援など良い面を主に伝え、復興に関する問題点はあまり触れなかったが、もう少し批判的なことを言った方が現状がより伝わったのではないかと発表後に思った。何人かのルワンダ側メンバーが、日本の震災後の支援を、ルワンダのジェノサイド後の支援と結びつけて発言していたことが印象的であった。また、前回の本会議で被災地を訪れたメンバーが、陸前高田市のことや戸羽市長の講演内容を覚えていてくれたので、今後も記憶にとどめておいてほしいと願う。(谷川)

【参加者感想】NPO など多くの機関が子どもに安心して遊べる場所を提供したり、精神的支援をしたりして、ストレスやトラウマを軽減しようとしているのはとても良いことだ。ルワンダでもジェノサイド後、UNICEF や UNESCO など多くの国際機関が、本、ペン、学費などを子どもたちに提供した。これは津波で親を亡くした子どもへの支援に似ている。昨年陸前高田市を訪問したとき戸羽市長がおっしゃっていた復興のための 8 年計画のように、被災者を支援しているのを見るのはとても素晴らしいことだ。子どもやお年寄りを守るため、津波がまた来る恐れがある地域に木を植えたり、より高い防波堤を建てたりすることが重要だと思う。(Valence Muvura : 昨年被災地を訪れたルワンダメンバー 谷川訳)

# 紛争と人道的介入

発表者：小坂 弘奈

日時：2月24日（日）15:00～15:45

参加者：白川、谷川、松本、Eugene, Rosette, Cynthia, Jackson, Ephrem, Valence Muvara,  
Valence Nsengiyumva, Marie Paule, Alex, Blaise, Placide, Kizito

## ■プレゼン要旨

紛争と人道的介入、これは私が大学のある講義で学んだテーマである。人の命や人権を不当に奪う戦争、絶対にあってはならないことであり、多くの人がそうした争いのない世界、<平和>を求めている。しかし一方で戦争を終わらせるためであれば武力を使っても良いという議論もなされている。人々はそれを<正しい戦争>と呼ぶ。人の命を奪ってでも争いを止めることは、正義と呼べるのだろうか。また、そうでもしなければ争いを止めることが出来ないのだろうか。私が大学での学びの中で抱いた疑問をルワンダの学生たちと考えてみたいと思い、このテーマで発表した。

## ■プレゼン詳細

紛争とは、人々が政府や一部の勢力に対して反乱することから始まる。反乱を起こすには不満、恐れ、強欲などの動機と、資金や低いリスクといった機会が必要とされ、それらの条件がそろった時、紛争へと発展する。反乱の動機と機会にはいくつかの大きな原因がある。私が大学で学んだのは、①貧困と紛争②天然資源と紛争③民族対立と紛争④民主化と紛争 といった4つの原因である。その中から私は①貧困と紛争 ②天然資源と紛争 の2つを取り上げて説明した。その後、民間人は保護されるべきだが、国際法により武力行使が禁止されていることによるジレンマについて述べ、1.正しい戦争はあるか 2.民間人保護の責任は当事国か国際社会か といったテーマでディスカッションを行った。以下は反乱（紛争）の大きな原因のうち2つである。

- ① 貧困と紛争の関係とは、低所得や経済停滞が続くと、人々の不満がたまり、また一部の権力者たちは強欲になり財産を独り占めしようとする。それが、人々に紛争への動機と機会を与えることになり、紛争が発生するという理論である。
- ② 天然資源と紛争の関係とは、天然資源を有する国では政府の腐敗が起りやすい。なぜなら、資源があることで国の財政はある程度潤うため、国民への課税は低くなる。すると国民の政府への監視も緩くなり、それをいいことに一部の役人は私腹を肥やそうとし、資源村の住民たちはそれに対し不満を抱き反乱を起こすというサイクルである。

## ■ディスカッション

当日、日ル両メンバーが交った 3 つのグループに分かれ行われた。以下 2 つの議題について 15 分程度議論したのち、それぞれ発表をした。

### 議題

1. 正しい戦争はあるか
2. 保護する責任は当事国にあるか、国際社会にあるか

### グループ A

1. 正しい戦争はある。アメリカはイラクが核兵器を保有しており、人々を守る正義のためとうたい戦争をはじめたが、実際にイラクは核兵器を持ってはおらず、アメリカはイラクの天然資源が目当てであった。これは正しい戦争とは言えないが、ルワンダの現政府はジェノサイドを止めるためにルワンダを攻撃し、実際にジェノサイドを止め、今のルワンダをつくった。これは正義であると言える。

### グループ B

2. 保護する責任は当事国にある。争いは当事国の政府や軍、警察によって解決されるべきである。しかし、それが不可能な状況に陥った場合は国際社会が助け舟を出す必要がある。

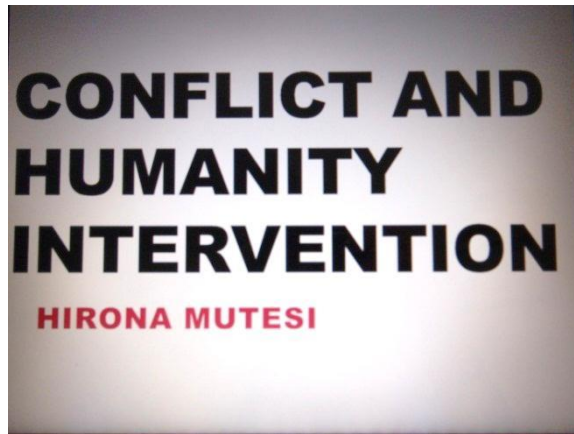
## ■感想

正しい戦争はあるかないか。今回私が学生会議に選んだテーマは戦争に白黒つけるという非常に難しいものであった。実際、私が大学の仲間と議論した際も明確な答えを見つけることができずに、議論は不完全燃焼のまま終わってしまった。しかし、私はこのテーマをルワンダ人はどう考えるのか知りたかったのだ。いざ議論してみると、やはりルワンダメンバー、日本人メンバーにとっても難しいテーマだったことがわかる。発表後に、この難しいテーマを議論するには説明が少なすぎたと反省した。

議論の結果、3 つのグループすべてが「正しい戦争はある」と答え、紛争を止めるためには犠牲を伴っても仕方がないと主張した。また、民間人を保護する責任はあくまでも当事国にあるというのもすべてのグループが同じ答えであった。この考え方は、ジェノサイド発生当時、国際社会から見放され、現ルワンダ政府が武力によってジェノサイドを止めたという彼らの歴史的背景（認識）が関わっているのではないかと考えた。私が大学で議論した際には、どこか「武力行使は時には必要である」ということを認めたくないような雰囲気があったが、彼らははっきり YES と言った。それが私にとっては新鮮でもあった。

今回私にとって 3 度目の学生会議になった。私は彼らと議論するたび、日本人学生の学ぶ姿勢の差を感じる。私の大学では、意見を持っているはずなのだがなかなか発表できず、ディスカッションが成立しないことがある。しかし彼らとの議論はそうではない。どんなに難しいテーマだとしても、自分の意見をどうにか出そうと努力するのだ。ともあれ、難

しいテーマながら彼らなりの答えを聞くことができ、私がひとりでは答えを見つけられなかった問題を共に考えることができたのではないかと自己満足した。(小坂)



## コラム ユジンのお腹

ユジンは、JRYC と Indangamuco (JRYC メンバーが所属しているダンスグループ) の代表であり、今会議では会計と Supervisor を務めた。

ある日のユジン。

私「おはよー。ユジン!」

ユジン「おはよー…。」(明らかに元気がない)

私「どうしたの?元気ないね。」

ユジン「実はお腹の調子が良なくて…。」

私「えっ!?大丈夫?薬飲んだ?」

ユジン「薬!?薬なんて飲まないよ。牛乳飲んだから大丈夫。」

私は全く予測していなかった、「牛乳を飲んだ」という回答に面食らった。彼によれば、彼のお腹は4日に1回くらいのペースで調子が悪くなるらしい。そして、調子が悪くなると牛乳を飲む。今会議中も、何度か調子が悪くなり、私たちも「今日、ユジンはお腹の調子が悪いんだろうな～」というのが傍から見ていて分かった。お腹の調子が悪い時のユジンは、驚くほど大人しいのである。

さらに私は、頭痛がすると訴えていたときの Nadine (ルワンダ人メンバー) にも遭遇した。私は、彼女にも薬を飲んだかどうか尋ねた。そして、彼女の答えは以下のものであった。

「薬!?薬なんて飲まないわよ。薬は体に良くないのよ。頭痛のときは、水を飲むのよ。水を飲んで寝るか横になって大人しくする。そしたら治るわ!! 腹痛のときは、牛乳を飲むのよ。そしたら良くなるの。」

私はこの答えに違和感を覚えた。彼女もユジンも、薬は体に良くないものと考えているらしい。普段、頭痛がするとすぐに薬を飲む私にとっては、信じがたい事実であった。そのことを彼女に伝えると、彼女も信じられないという様子だった。ただ、ルワンダ産牛乳を飲んで、軽い腹痛に襲われた私にとっては、彼らの方法は通用しないだろう。(松本)



↑楽しそうにプールで泳ぐユジン。ゴーグルがよく似合う。(左)

おいしそうにポテトサモサを食べるユジン。(右)

# ルワンダ側からのプレゼンテーション

---

## Food security in Rwanda

発表者：Valence MUVARA（報告者：谷川琴乃）

日時：2月20日（水）9:25～10:00

参加者：小坂、白川、谷川、松本、Eugene, Blaise, Jean de Dieu, Cynthia, Kizito, Ephrem

### ■プレゼン概要

food security（食料安全保障）の定義、ルワンダでの状況を述べた上で、それに関して行われている政策と、政策の成果を説明した。

### ■プレゼン詳細

#### 食料安全保障の定義

食料安全保障とは、必要不可欠な栄養を得ることが保障されていることである。健康的な生活を送るために十分な・安全な・栄養のある食べ物を、家庭や国が提供することができるかを測る指標でもある。

#### ルワンダにおける食料安全保障

ルワンダにおける飢餓の状況は、所得を反映している。2006年から2011年の間、改善が見られた。最低限の食料を買うことのできる収入以下で暮らしている人の割合は、37%から24%に減少した。ミレニアム開発目標は17%である。2011年と2012年にルワンダで主食の価格が高騰したことを考えると、この達成は簡単ではない。ある研究によれば、5歳未満の子どものうち16%が標準体重に達していない。しかし、他国と比較するとルワンダの食料安全保障の状況は悪くはない。周辺諸国と違い、ルワンダは国内生産が常に消費を上回るレベルにまで生産を高めることに成功した。

#### 食料安全保障を妨げる要因

根本原因は、農地の平均面積が小さいことだ。政府によると、人口の60%が0.7ヘクタールの農地に依存している。年2.8%の高い人口増加率も、1人当たりの農地の縮小に拍車をかけている。人口はこの10年で30%も増加し、1km<sup>2</sup>あたり約370人という人口密度は、アフリカで最も高い。この構造的な脆弱性は、耕地の80%が斜面に存在するというルワンダ特有の地形によるところが大きい。生産を向上させるのに必要な資源や手段を持たない貧しい農民が、持続的でない農法を採用しているため、土壌の侵食はさらに悪化している。人工的な灌漑がほとんどなく、年2回の収穫に頼っているルワンダの農家は、変わりやすい気候や旱魃、自然災害の影響を受けやすい。飢餓につながる最も深刻な危険は、ポテトなど主食しか生産できないためそれしか収入源を持たない農地があることである。

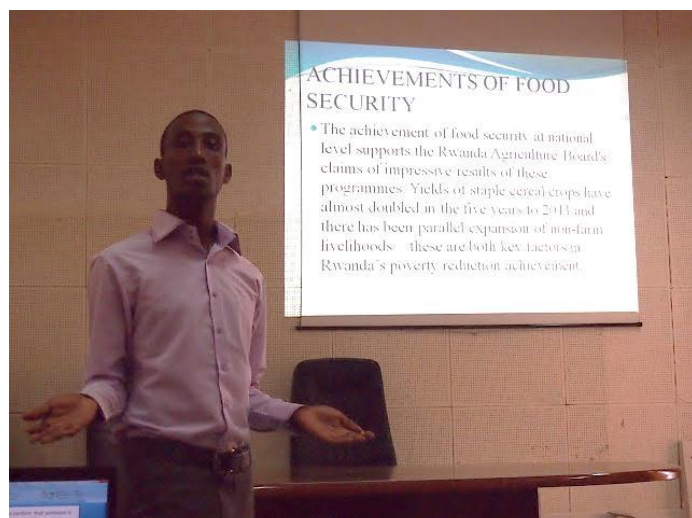


## 解決策

ルワンダでは人口の 73%が農業で生計を立てている。そのため政府は農業分野への投資が貧困削減に最も効果的であると認識しており、全体予算に占める農業分野への予算の割合を 10%に増やそうとしている。国は、すべての農家が肥料や灌漑など高い技術の恩恵を受けられるように支援するという、農業の近代化を目指す政策を進めている。また、2005 年の土地法により、過去の複雑な土地保有権に関する遺産は取り払われ、5 年計画も 2009 年から進行中である。現在は女性にも土地所有権がある。政府はまた、1 家庭に 1 頭の乳牛を配るという革新的な Girinka 計画により貧困家庭を支援している。牛乳の生産は栄養状態を向上させ、家庭に収入ももたらしている。政府の「環境と天然資源部門における戦略計画」(2009 年～2013 年)は、土壌・水質改善に集中的に取り組んでいる。この結果、2006 年の 2 倍の土壌を浸食から防ぐことができた。つまり、この政策は農地の拡大に貢献したといえる。

## 食料安全保障の成果

上記の政策により、主食穀物の生産量がこの 5 年間で 2 倍に増えた。またそれに加え、紅茶・コーヒーなど商品作物の栽培も盛んになった。これらはルワンダの貧困削減において重要な役割を果たしている。



## Who can be classified as a HERO ?

発表者：Blaise Pascal MUVUNYI （報告者：谷川琴乃）

日時：2月20日（水）14:00～14:30

参加者：小坂、白川、谷川、松本、Eugene, Valence Muvura, Kizito, Alex

### ■プレゼン概要

ヒーローとはどのような人物か、ヒーローの特徴をいくつか挙げた上で、ルワンダと日本の典型的なヒーローを紹介した。議題は、ルワンダと日本におけるヒーローのとらえ方の違い、我々JRYC（日本ルワンダ学生会議）のメンバーもヒーローとなりうるかどうかである。

### ■プレゼン詳細

#### ヒーローとはどのような人物か

- ・自発的に、自分のすべきことの枠を超えて、何かを成し遂げようとする人物
- ・社会的ニーズ、個人・団体のニーズに応える人物
- ・自分にとっての快適な空間から抜け出し、身を危険にさらすことを厭わない人物

\*つまり、ヒーローは自分の義務やすべきことだけにとらわれず、自発的に行動する。我々JRYCメンバーは大学の学業だけでなく、JRYCの活動に自発的に参加しているという点ではこの特徴を満たしていると考え。

#### ヒーローの特徴

- 1.勇気がある（恐れに立ち向かい、それを乗り越え悪い状況を改善しようとする。何が真実・正義なのかについての考えをしっかりと持ち、何があろうと成し遂げる強い決意を持つ。）
- 2.何かに長けている（成功するチャンスをもつことを可能にする重要な技術を持っている）
- 3.運命（困難に立ち向かうにふさわしい素質を生まれ持っている。）
- 4.傷をもつ（肉体的・精神的に傷を負っている。このことがヒーローを必ずしも強くなく、完璧ではない存在にしている）

#### ルワンダにおけるヒーローの例：Félicité Niyitegeka

1934年生まれ。ジェノサイドの際ツチをかくまったため1994年4月21日に殺された。彼女はフツだったが、友達はずチだった。逃れてきたツチを彼女がかくまっていることに民兵が気付いたため、兄弟からツチから離れるように言われたが彼女は断った。民兵が彼女の家に来たとき、彼女は既に30人のツチ避難民を家にかくまっていた。

\*ここで、しばしばルワンダのヒーローとして挙げられるFred Rwigyemaを選ばなかったのは、彼は軍人であったからだ。一般の女性であったFélicité Niyitegekaを選んだのは、ヒーローになるには武器を持った強い軍人である必要はないことを示したかったからだ。

### 日本におけるヒーローの例：佐々木禎子

1945年、広島に原爆が投下された時、彼女は2歳だった。11歳で白血病と診断される。当時白血病は死の宣告に等しかった。原爆症と闘った彼女の勇気と、千羽の鶴を折る決意は世界中の人々に感動を与えてきた。12歳で亡くなった後、彼女は世界中で平和の象徴となり、彼女の話は学校で子どもたちに教えられている。

\*佐々木禎子さんが尊敬される3つの理由

1. 困難に立ち向かう彼女の精神、決意、勇気
2. 後の世代に平和の象徴（折り鶴）を伝える役割を果たしたこと
3. 彼女が平和を象徴する少女として後世に伝えられていること

### JRYC メンバーはヒーローになれるか

JRYCのニーズを満たす、他の人に影響力を持つ、革新、コミットメント、不正義にどう対応するか、などの尺度が考えられる。

### 結論

- ・「ヒーローであること」は「恐れないこと」ではなく、どんなに危険な状況においても行動をおこす勇気を持っていることである。
- ・ヒーローとは我々のような人。誰でも、どこにいても、ヒーローとなりうる。

### ■質問・ディスカッション

Q.ルワンダでは死後にヒーローだとされるが、日本ではどうなのか？(Blaise)

A.必ずしも死後である必要はない。生きている人もヒーローになれる。(小坂)

A.死後にしかヒーローになれない理由は、良いことをしてその時点でヒーローと認められたとしても、人生の最後のほうで悪いことをしたらヒーローと呼ばなくなってしまふからだ。(Eugene)

Q.ヒーローの特徴として、他に考えられるものは？(Blaise)

A.忍耐強い。(Kizito)

A.愛国心がある。(Valence)

Q.我々JRYCメンバーもヒーローになれると思うか？(Blaise)

A.なれると思う。今日、私たちはアイスクリーム店に行った。月1回子どもに無料でアイスを配るための募金箱があったので、私たちは募金をした。それはとても小さなことかもしれないが、そうすることで私たちは子どもたちにとってのヒーローになれる。(小坂)

A.勇気があり、一生懸命何かに取り組み、忍耐強いならば、JRYCメンバーもヒーローになれると思う。(Eugene)

Q.あなたはヒーローになりたい？（松本）

A.もちろなりたい。でもただ有名になりたいわけではない。自分の行動を通じて、次の世代に感動を与えられる人になりたい。（Blaise）

Q.ルワンダでは国から認められ、かつ既に亡くなった人物しかヒーローとは言わないが、日本の状況を教えてほしい。日本では誰がヒーローとされているか？（Eugene）

A.日本では全ての人からヒーローだと思われる人物はいないが、例えば杉原千畝はヒーローといえると思う。彼はナチスに迫害されたユダヤ人にビザを発行して多くの命を救った。しかし日本政府の許可なしでその行動をとったため、日本に帰ると仕事を失った。（小坂・谷川）

Q.日本政府に逆らったのなら、では彼をヒーローとして認めたのは国連か？（Eugene）

A.いや、彼の死後、日本政府が彼の名誉を回復した。（谷川）

Q.（もう一人のサダコ(緒方貞子さん)について) 彼女は生きているがヒーローか？（Alex）

A.多くの方が彼女の行動を尊敬しているから、ヒーローといえると思う。（小坂）

### ■参加者感想

HERO と聞いて最初はイメージがつかめなかったが、説明や例を聞いて、尊敬されている人や偉人というようなイメージだと推測した。ルワンダと日本におけるヒーローの認識は、生きているか死んでいるかの点、国が認めるかどうかの点で異なっていることが分かった。しかし、どのような人物をヒーローだと思うかについてはほぼ共通していたと思う。勇気を持っている、忍耐強い、人に感動を与える、後世に語り継がれる、困難に立ち向かう、などの特徴が挙げられたことから、立派だ、尊敬できる、こういう人になりたい、と思う人物像は同じなのではないかと感じた。また、発表者 Blaise が選んだヒーローの例が興味深かった。ルワンダのヒーローとしてツチを助けようとしたフツの女性、日本のヒーローとして佐々木禎子さんの例を挙げており、彼のヒーローのとらえ方に共感を持った。私たちのような「ふつう」の人でもヒーローになれる、というメッセージが心に残った。（谷川）

## コラム 恋バナ in ルワンダ

ルワンダンと話していて、一番盛り上がる話題と言えば、「恋愛」や「結婚」に関する話題。私自身、彼らと話していて、日本とルワンダではこんなにも恋愛・結婚に対する考え方が違うものかと、驚かされた。

一番驚いたことは、ほとんどの人が、「〇年後に結婚する」というビジョンがあることである。今現在、恋人がいる人もいない人も、自分が結婚する時期というものは、決めているようであった。私としては、「〇年後」という数字が、何を根拠に導き出されているのか気になったので聞いてみると、「なんとなく…」とか「だって、そういうものでしょ!？」といった、あいまいな答えしか返ってこなかった。

また、日本とルワンダでは『イケメン』の基準が大きく異なった。あるルワンダン女子に、Indangamuco (ルワンダメンバーが所属するダンスグループ) の中で誰がカッコイイと思うか聞かれたので、数名の名前を挙げてみると、「ありえない!!!どの人も女子みたいなカワイイ顔してるから、全然カッコよくないわよ!!」と、一喝されてしまった。彼女によると、ルワンダでは、筋肉があって、背が高く、肌の色が濃い人ほどカッコイイとされているらしい。さらに、恋人選びの基準も違う。先ほどの彼女によれば、ルワンダでカップルが成立する絶対条件は、男子が女子よりも年上であることである。日本のように、自分と同年の相手や年下の相手とカップルになることは、考えられないらしい。また、ルワンダ男子は積極的だから断りきれずに、二股してしまうルワンダ女子もいるそうである。

しかし、日ル女子の間で、『イケメンではない人』は誰かという問いに対する答えだけは、完全に一致した。『イケメン』の基準は違っても、『イケメンでない』の基準は同じ。う〜ん…。私も女子ではあるが、女子ってコワイ。(笑) ごめんね for that!!

(松本)



↑ 空港(左)と結婚式会場(右)でポーズを決める日ル女子たち。

## AGACIRO Development Fund

発表者：Eugene MAZIMPAKA（報告者：白川千尋）

日時：2月24日（日）11:40～12:20

参加者：小坂、白川、谷川、松本、Alex, Cynthia, Ephrem, Jackson, Kizito, Marie Paule,  
Valence Muvara, Valence Nsengiyumva, Rosette, Nadine

### ■プレゼン要旨

AGACIROとは外国からの財政援助に頼らず、独自の力で国の財政レベルを向上させるために整えられたルワンダ初のルワンダ開発基金である。AGACIROが目指すものとは国の発展であり、ルワンダの国民、企業そしてルワンダに住む外国人は義務として基金に協力しなければならない。

### ■プレゼン詳細

AGACIROとはキニヤルワンダ語であり、dignityと英語に訳すことができる。ルワンダ政府がこの基金を作ることを決めた背景には、アメリカやヨーロッパ諸国がルワンダに対する財政援助を打ち切ったことが背景にある。西欧諸国がルワンダに対する財政援助を打ち切った理由は、ルワンダがM23（コンゴ民主共和国の反政府武装勢力）の活動に加担したと非難しているためである。財政援助を打ち切られることはルワンダにとって開発はるか、国民が生活できなくなってしまうことを意味する。ゆえに、ルワンダ政府は独自でAGACIROという開発基金を作ったのである。

AGACIROはルワンダに住む人、企業の寄付によって成り立っており、義務として寄付に協力しなければならない。AGACIROは私たちが生活できるようにすることはもちろん、長期間にわたる持続的な経済開発と次の新たな世代を手助けするためにもある。

この基金の目的は外国の財政援助に頼って国を発展させるのではなく、ルワンダ独自の力で国を発展させることである。しかし外国の援助に頼らずに国を発展させることはルワンダにとって深刻である。なぜなら、ルワンダは豊富な天然資源に恵まれていないからである。



### ■ディスカッション（Q：発表者 Eugene）

Q.ある国や誰かに寄付をする時、寄付する側は寄付金が何に使われるかを指定する必要があると思うか

A.必要だと思う。寄付金が何に使われたかを明らかにしなければ、本来寄付する側が望ん

でいた寄付金の使われ方を寄付される側がしていないということもあり得る。例えば、貧しい人のために寄付したお金が実際彼らのために使われることなく、お金持ちの人の下で使われてしまうこと。お金の使い道を事前にしっかり決めたり、お金以外の援助物資、例えば食べ物だっりの援助の方が望ましい。

- Q.その使い方は良いと思う。しかし、寄付される側は寄付金の使い方を間違ってしまうこともある。もし寄付される側の要求が本来の金額を超えてしまったら？
- A.寄付する前の話し合いが必要だと思う。援助をする前に、援助される側のニーズを知らなければいけないし、援助する国と援助される国は話し合いで物事を決められるような良い関係を築かなければいけない。
- B.援助をする前に、する側とされる側は良い関係を築いていなければいけない。また、援助される側はお金の使い道を決め、それを守るという約束をしなければいけないと思う。

### ■参加者感想

このプレゼンを聞いてまず驚いたことは、ルワンダ人が M23 のことを知っていたということである。情報規制が厳しいルワンダでは、隣国コンゴの反政府組織に援助をしていたということを知らない学生、もしくは知っていても公には言わない学生が多いだろうと考えていたが、ある学生は M23 について言及していた（しかし彼は、天然資源を求めてルワンダ軍がコンゴに侵入していることは知らなかった）。

AGACIRO の目的は外国からの援助に頼らず、自力でお金を集め、開発していくことである。自力でお金を集め、国を運営していくことができるということは、“開発途上国”というレッテルが剥がされるための一つのポイントであると思う。「開発援助学」、「開発教育」、「開発途上国へのスタディーツアー」などといった、途上国における「開発」と「援助」という言葉は日本では特に人気が高いように思われるし、それだけ日本と日本人の開発途上国をどうにかしたい！という気持ちが強いということの表れでもあるのだろう。しかし果たして日本は開発途上国と呼ばれる国々が脱援助を達成して、あらゆる分野が先進国並みの水準にまで達してほしいと思って「開発」や「援助」をしているのだろうか。また、「開発援助」を一方向的に良い行いと決めつけて、現地の本当のニーズを無視しているということはないだろうか。「開発」、「援助」とは大変きれいな言葉である。だから乱用もされやすい言葉でもあると思う。本質を考えることなく「途上国に対する開発や援助は良いことである」ということが日本全体に広まっていたとすれば、それは「原発は安全である」といった神話の形成につながりかねない。つまり、「開発や援助は途上国にとって良いこと」と決めつけるのではなく、本当に必要としているのか？ そもそも今は援助を望んでいるのだろうか？ 開発ってなんだ？ 援助とはなにか？ というように疑問を抱き続け、自分の行いを疑うことが、開発途上国というレッテルを剥がすことにつながるのではないだろうか。

(白川)

# Contribution of Gender in the Development of Countries

発表者：Nadine IRANZI KARINGANIRE（報告者：松本万里子）

日時：2月24日（日）16:00～16:25

参加者：小坂、白川、谷川、松本、Alex, Cynthia, Ephrem, Eugene, Jackson, Kizito, Marie Paule, Valence Muvara, Valence Nsengiyumva, Rosette

## ■プレゼン要旨

発展途上国では、貧困と女性に対する差別・苦難が平行して起きている。そのため女性の地位を改善し、男女平等を目指すことはたとえ批判があったとしても、貧困削減や国の発展につながるのである。

## ■プレゼン詳細

### 導入

男女平等とは、生物学的理由が存在する場合を除いて、男女が同等の権利を有し、同等の扱いを受けるべきであるということである。国連の人権宣言には、すべての人は、法の下に平等であり、同等の勤労に対し同等の報酬を受ける権利を有するとある。

### 女性の能力

経済指標や社会指標では、発展途上国において貧困と女性に対する差別・苦難が平行して起きているということを示している。しかし、文化に深く根付いているため、このような事態を変化させるには、相当の努力が必要である。女性は、貧困削減を実現する重要な主体であるだけでなく、食料問題や人口問題といった様々な問題の最前線に立ち向かう主体でもある。

### 「開発と女性」と「ジェンダーと開発」

女性に能力や教育・収入がないため、女性が問題であるとする「開発と女性」の考え方は違い、「ジェンダーと開発」という考え方は、男女の役割・責任を見直し、女性に対する差別的制度や社会制度を変えていくことが必要であるとする考え方である。この考え方を適用することによって、男女平等が実現するのである。

### 世界銀行による政策

世界銀行は、「開発と女性」の必要性を認め、1977年に「開発と女性」に関する顧問を設置した国際機関である。その後、1980年代より重視されるようになってきた「ジェンダーと開発」という考え方にに基づき、男女平等に向けた政策を発表した。

### Genetic symbol of Gender





## 批判

「ジェンダーと開発」は、男女の社会的相違を強調するといった批判や、男女の絆、男女の役割・責任の変化の可能性を無視しているといった批判を受けることがある。

## 結論

たとえ男女平等が批判されているとしても、男女平等を目指すことは、国の発展につながることである。

## ■質疑応答

Q.どこの国でも伝統的に女性は男性より弱いと言われてきた。日本にも女性に対する差別は存在するのか。(Eugene)

A.存在する。今でも、女性が働くことを良く思わない男性は存在する。(小坂)

Q.日本において、男女は教育機会などの点で、平等に扱われているのか。(Valence)

A.教育の機会は同じだが、社会に出てからの扱いは異なる。例えば、女性の収入は男性の収入より少ない。(小坂)

## ■感想

【発表者感想】日本のような発展した国で、収入における男女格差が存在することに驚いた。ルワンダでは、同じ仕事なら、女性と男性の賃金は同じである。さらに、就職においても、優先されるのは女性である。(Nadine 谷川訳)

【参加者感想】このプレゼンを通じて、日本人とルワンダ人のジェンダーに対する意識の差を感じた。ルワンダ人の方が、ジェンダーに対する意識が強く、学生会議の活動においても、ジェンダーの面で配慮がみられるときがある。日本でも、法律を整備し、男女平等に取り組んでいるが、上手く機能していないことがあるため、ルワンダから教わる部分があるのではないかと、考えた。(松本)



## コラム 命名 in ルワンダ

ルワンダに渡航する際、私たちにはひそかに目標にしていたことがあった…それは、

### 「キニヤルワンダ名をもらうこと」。

キニヤルワンダとはルワンダの現地語であり、ルワンダ人は全員、下の名前とは別に、キニヤルワンダ名を持っているという。(ちなみにルワンダ人の下の名前はほとんど西洋の名前である。) 私たちがその名前の存在を知ったのは、渡航前、ルワンダに赴任したことのある JICA 職員の方がしてくださった講義がきっかけである。その方は、親しくなった現地のルワンダ人に、キニヤルワンダ名を付けてもらったという。うらやましくなった私たちは、ルワンダに着くとさっそくルワンダメンバーに命名してもらった。白川は「Mutoni ムトニ」(意味:美しく、勇敢)。小坂は「Mutesi ムテシ」(意味:親から最も愛された子)。松本は「Teta テタ」(意味:両親に愛された子)。そして私は…もう名前が思い浮かばないのか、あーでもないこーでもないとさんざん考えた結果、「Cyiza チザ」に決定。意味は、これまた「美しい」。ちなみに後で知ったことだが、この名前は双子にしか付けられないらしい。(私は双子ではない。) よほどネタ切れだったことがうかがえる…。

まあ、とにかく名前を付けてくれてありがとう！

ルワンダ滞在中、幾度となく自己紹介で自分たちのキニヤルワンダ名を披露してきたが、毎回大ウケであった。

すると、ルワンダ人たちも「日本名がほしい！」と言い出すではないか。よし、付けてあげる！と言ったものの、これが意外に難しい。しかしがんばる。これこそ文化交流であると信じて。

以下が、私たちが彼らに付けた日本名である。もう最終的にイメージに頼るしかなかった…。

- ・アイリーン：優花ユウカ (明るくて優しいから)
- ・ユジーン：たけし (ジャイアンズのイメージ)
- ・ロゼット：香カオリ (近づくといいい香りがするから)
- ・ババ：一輝カズキ (ブリリアント)
- ・ジャクソン：元気ケンキ (いつも元気だから)
- ・シンシア：光ヒカル (ひかるっぽいから…)
- ・ロバート：けいすけ (けいすけっぽいから……)

他にも、佳代子、三郎、タダシ、タクヤ…など数えきれないほどの名前を付けた。こんなに命名が大変な作業だったとは。でも日本名をあげるとみんなとても喜んでくれた。中には勢い余って Facebook の名前に登録してしまったメンバーも…。

今回の渡航は、名前に関する楽しい思い出がいっぱいだ。特に「たけし」ことユジーンが、偶然にも「Takeshy」(意味は不明)とプリントされた T シャツを着てきたときには爆笑してしまった。

皆さんもルワンダに行く際は、ぜひキニヤルワンダ名をつけてもらうことをおすすめします。

(谷川)

# 第三章

---

## ルワンダ現地 活動報告

1. JICA 事業	44
2. ジェノサイドメモリアル訪問・インタビュー	48
3. アイスクリーム店 (Inzizi Nziza)	58
4. PIASS	66
5. 教会	68
6. King's Palace	70
7. ピースコンサート	72
8. ホームステイ	74

# JICA 事業

担当者：松本 万里子

## 1. 訪問日時・場所

日時：2月15日（金）7:30～12:30

場所：ブゲセラ群 Mwego セクター

参加者：小坂、白川、谷川、松本、Eugene, Irene, Valence Muvara

## 2. 企画目的・訪問の経緯

ルワンダにおいて農業は、国民の80%以上の人々が従事する重要な産業である。ルワンダの主要産業に対し、日本がどのような役割を果たしているのかについて、実際の現場を訪れ学びたいと考えていたことが、今回の企画に至った動機である。

また、国民の大半が従事している農業について学ぶことで、一般のルワンダの方々の生活それ自体を知ることができ、同時に課題なども見えてくるのではないかと考え、今回の訪問を依頼した。

## 3. 訪問先概要

今回、我々が訪問したのは、『ルワンダ国東部県農業生産向上プロジェクト』である。このプロジェクトは、National Agricultural Export Development Board (NAEB)と Rwanda Agricultural Board(RAB)が JICA とパートナーシップを組み、行っている。

このプロジェクトの目的は、①2つの地域(ブゲセラ郡、ンゴマ郡)における米の生産を向上させること、②対象地域における園芸作物生産者組合の収益が高められること、である。この目的を達成するために、まずは市場調査を行う。その結果得られた情報を基に、地域に適合した作物を選定し栽培、栽培のために必要な技術の普及などを実施している。どの過程においても、農民が参加することによって、農民主体で活動できるような仕組みになっている。

また、ルワンダ国の農業政策に基づき、導入技術の選定を行い、土壌侵食防止技術や堆肥作成技術などの普及も実施している。

## 4. 当日活動内容

7:30	キガリにある JICA 事務所にて、専門家の中村友紀さんと合流。そこから車で1時間半ほど経て、現地に着。
9:00	NAEB や RAB の職員による、農民への技術研修を見学。
11:00	畑へ移動。先ほど教わった知識を活用しながら、ナスを植える。 コンポスト作り見学。
12:20	農民へのインタビュー。

### 【職員による農民への技術研修】

道路に車を止め、しばらくすると農民たちが集まった。木陰に木製の長椅子を並べ、黒板代わりに大きな白い紙を用意し、技術研修が始まる。まさに、青空教室といった光景である。

組合に参加している農民たちの中から、約30人程度が集まり、職員による研修を受ける。1回の研修は、約1時間程度である。しかし、この日の研修は約2時間程度に及んでいたので、最後の方になると、農民たちに疲れた様子がうかがえた。ただ、途中で抜ける人や、不満を言う人はなく、皆静かに集中して研修を受けていた。中村さんによれば、あらかじめ研修が長引くことが分かっている場合には、バナナを用意したりレクリエーションをしたりするなど、休憩をとりつつ、農民が退屈しないように工夫をこらしているそうだ。今回は、休憩時間はなかったが、それでも農民たちの表情は真剣だった。

農民たちが研修を受けている様子を見学しつつ、我々は中村さんより、この研修に関する説明を受けた。この研修には、組合員にJICAより交通費として、1回につき1人当たり



2000ルワンダフラン支給されている。参加しないということに対する罰則はないが、参加率はほぼ100%である。交通費を支給するというのが、インセンティブになっているのである。農作業には女性も参加するため、この研修にも多くの女性が参加している。こういった研修の後、モニタリングして収益が上がったかどうか、技術が引き継がれているかどうかを確認することも、中村さんの仕事である。

### 【畑での実習】

研修の後、皆で畑へ移動した。実際に田を耕し、ナスを植えるのである。

まずは、田に杭を打ちロープを張り、耕す範囲を決める。その際、〇〇cmという表現では理解しにくいので、ペットボトル何本分という表現や何歩という表現を使って長さを測る。範囲が決まると、次は田を耕す。この作業には、我々も参加させていただいた。堆肥と土を混ぜながら耕していくのだが、これがなかなか難しかった。結局、筆者がよれよれになりながら鍬を持ち上げていると、隣にいた男性が見兼ねて筆者より鍬を奪い、さっさと耕してしまった。

その後、耕した田に藁をかぶせ、等間隔に穴を掘りナスを植え、最後に水をやり作業は終了した。



ナスを植えた後は、コンポスト作りを見学した。まずは、縦横 1.2m 四方に杭を立て、コンポストを作る範囲を決める。次に、藁を敷き詰める。その上に、牛の糞をかぶせ、また藁を敷き詰める。その後、人がその上に乗り、踏みつける。この作業には、我々も参加した。「藁を敷く→牛の糞をかぶせる→藁を敷く→踏みつける」という作業を3~4回繰り返し、作業は終了した。このまま約3か月経つと、発酵が完了し田に撒くことができる。

#### 【農民へのインタビュー】

この研修に参加していた1人の女性にインタビューした。

Q：普段、何を食べていますか。

A：豆、サツマイモ、キャッサバなどを食べています。

Q：子供はいますか。

A：はい。5人います。2人は高校へ、3人は小学校へ通っています。

Q：学校の授業料は高いですか。

A：政府のおかげで、小学校教育までは授業料がかからないため(公立学校に限る)、今のところ問題ありません。

Q：あなたは、子供のころ学校へ行く機会がなかったそうですが、それはなぜですか。

A：今の時代、すべての子供が学校へ行くことは、慣習となっていますが、昔はそうではありませんでした。ですから、私の両親は、私が学校に行かないことを気に留めていなかったのだと思います。

Q：自分で作った野菜を販売しますか。

A：子供たちに食べ物が十分に行き渡り、余分に余った場合にのみ、販売します。

Q：野菜を売った場合、ひと月あたりどれだけの収入になりますか。

A：野菜を売るか売らないかは、買い手のニーズによりますが、ニーズがあればポテトやキャッサバなどを売ります。しかし、ひと月でどれだけの収入になっているのかということは、よく分かりません。

Q：子育てをしながら、このような研修に参加することは、難しいことですか。

A：難しいことではありますが、いろいろと勉強になるので、できるだけ参加するように努

力しています。

Q：この事業のような外国からの支援について、どう考えていますか。

A：とても良いことだと考えています。このような支援によって、知識や技術を身に付けることができ、そのおかげで子供にまで利益をもたらすことができるからです。また、次の段階へとステップアップするための知識も得ることができるからです。

## **5. 感想**

今まで、文書や写真、映像でしか知らなかった世界が、今、目の前に広がっている。この事業訪問している最中、自分を客観視しながらそのようなことを思い、胸が熱くなった。農民の真剣な表情や熱心に取り組んでいる姿が、とても印象的であった。彼らは、貧困でも飢餓でもなく、自給自足の生活をしている。知識・技術を得て、生活に変化をもたらしたいという思いから、この研修に参加している。彼らのそのような姿勢に、何かたくましさを感じた。

また、土にまみれ、彼らと共に作業できたことは、とても貴重な体験だった。このような配慮や、丁寧な説明をしてくださった中村さんには、心より感謝申し上げたい。(松本)



# ジェノサイドメモリアル訪問・インタビュー

担当者：白川 千尋

## 1. 訪問日時・場所・参加者

2月14日(木)	キガリメモリアル (ギソジ)
	小坂、白川、谷川、松本、Valence Muvura, Eugene, Irene
2月18日(月)	ムランビメモリアル (ギコンゴロ)
	小坂、白川、谷川、松本、Eugene, Jackson, Marie Paule, Valence, Rosette, Roberts, Fils, Nadiya, Berchmans
2月19日(火)	インタビュー (ブタレ パルトスホテルロジ)

## 2. 企画の目的・経緯

1994年に100日間でおおよそ100万人が殺されたという信じられない出来事がアフリカのルワンダという国で起こった。政治的な意図のもとに、ルワンダ人が何の躊躇もなく同じルワンダ人を殺した。この出来事をきっかけに、筆者は当団体に所属し、いつかジェノサイドに関する企画をやろうと決めたのである。そして、この第9回本会議で筆者がジェノサイド企画を担当するに至る。

ジェノサイドから19年が経過した現在、ジェノサイドを直接経験していない世代が増えつつある。筆者は、ジェノサイドに対する認識に“差”ができていないのではないか？という疑問を抱き、年齢の異なるルワンダ人学生を対象に94年のジェノサイドをどのように考え、学んでいるか、また経験者から当時の状況、また両者に共通した質問として今後ジェノサイドが二度と起こらないようにするためにはどうすればよいかといったインタビューを行おうと考えた。さらに、二か所のジェノサイドメモリアルを訪問することでジェノサイドに対する知識を深め、同時にルワンダの歴史を学ぶことができるのではないかと。また、ジェノサイドがいかに惨劇たるものであったかを考えることができるのではないかと思ひ、ジェノサイドメモリアル訪問・インタビュー企画を提案した。

当企画の目的は、ジェノサイドを直接経験していない学生、経験した学生を対象にインタビューすることでジェノサイドに対する認識、考えに違いはあるのかを知り、さらに、インタビューを通じて、ルワンダ人の生の意見を聞く機会を得ること。また、メモリアルに訪問することで、ジェノサイドに対する知識をより深めることである。



### 3. 訪問先概要

#### キガリメモリアル (ギソジ)

キガリメモリアルは、首都キガリから徒歩と車を20分ほど走らせたギソジという所にある。このメモリアルは植民地にされる前の王政時代から現代に至るまでのルワンダの歴史も紹介しており、またルワンダのジェノサイドだけではなく、例えばナチスによるホロコーストやボスニア・ヘルツェゴビナ紛争といった世界で起こった大量虐殺をも展示していた。さらに、ジェノサイドで殺された子供たちを中心に展示している部屋もあり、名前・当時の年齢・殺され方など細かく紹介されていた。他にも、殺すために使ったマシエツト（主に農作業で使うナタ）や殺された人々が着ていた衣服も展示されていた。メモリアルの外には、ジェノサイドで殺された人たちが眠っているお墓もあった。



#### ムランビメモリアル (ギコンゴロ)

ムランビメモリアルは、ブタレから車を利用して1時間ほどの所にある。建物は丘を登りきった所にあり、大変見晴のよい場所にあった。本館らしき建物にはキガリのメモリアル同様ルワンダの歴史を展示しており、また殺された被害者の衣服も展示していた。屋外には、ムランビで殺された人々約40,000人が埋められているお墓があった。ムランビメモリアルにはいくつか分館があった。それらは学校の教室のように見えたが、ジェノサイドが起きた当時、実際そこは学校であった。教室には学校に逃げ込んできたであろう人々のミイラ化した遺体が殺された当時の姿で置かれていた。遺体の腐食を防ぐための薬は鼻を突くような臭いであった。他にも、殺された人々の頭蓋骨や殺された人々が履いていた靴のみを展示している部屋、ジェノサイドを終息させにきたフランス軍がフランス国旗を立てたとされる場所、遺体の上でバレーボールをしていたとされる場所、遺体が無造作に埋められていたという穴跡地があった。



#### 4. 活動報告

##### 2月14日（木） キガリメモリアル

ルワンダの歴史、ルワンダのジェノサイド、他国の大量虐殺を展示した部屋などを見てまわった。その後、屋外にあるお墓を訪れた。館内に戻り、ジェノサイドで体が不自由になってしまった人々などを支援する募金活動に協力した。

##### 2月18日（月） ムランビメモリアル

ルワンダの歴史が細かく書かれた部屋を見た後、メモリアルのガイドと共に屋外へ移動しお墓の前で一分間の黙禱捧げた。ミイラ化した遺体や頭蓋骨が置かれている部屋を一つずつ見てまわり、再び屋外へ出て、フランス軍が旗を立てていたとされる場所やフランス軍が遺体の上でバレーボールをしていたという場所を見て、最後に遺体が埋められていたとされる穴跡地を見た。館内へ戻り、来訪者ノートにそれぞれのメッセージを残し、寄付金が文房具といった学用品に換わる募金活動に協力した。

##### 2月19日（火） インタビュー

ジェノサイドを経験した人と経験していない人（または記憶にある人と記憶にない人）を対象にジェノサイドに対する認識や考えの“差”はあるのかどうかを3人の学生にインタビューを行った。以下はインタビューの詳細である。

#### **■女性・20歳・ルワンダ国立大学**

Q.ジェノサイドが起きたとき、何歳でしたか？

A.0才でした。

Q.あなたはジェノサイドが起きたときには生まれていたが、覚えてはいないということですね？

A.私はとても若かったので覚えていませんが、母親がジェノサイドを経験しました。

Q.以前、あなたの手首にはジェノサイドの時に撃たれた傷跡があると聞きましたが、その傷について教えてください。

A.ジェノサイドの時、私の母はマシェットで殺されかけました。母はマシェットでは死にませんでした。その後、銃で撃たれて倒れました。そのとき、私は母の背中に背負われていました。私は赤ちゃんだったので、インテラハムウェ（フツ系過激派民兵組織）が私の腕を撃ち抜きました。私は倒れて母が私を抱きおこしました。ジェノサイドの間、母は必死で医者に連れて行こうとしていました。

Q.あなたは小学校、中学校、高校でジェノサイドについて学びましたか？

A.はい。私たちはジェノサイドや世界の他のジェノサイド（アルメニアなど）を歴史の科目として学びました。

Q.あなたはジェノサイドを歴史の科目として学んだと言いましたが、学校教育の一環としてジェノサイドメモリアルに行ったことはありますか？

A.はい。4月にジェノサイドの追悼式が行われるのですが、ルワンダ人はたいてい出席します。私は追悼式の時にジェノサイドメモリアルに行きました。

Q.フツについてどう思いますか？

A.私にとってフツはルワンダ人の一部であるし、たとえ彼らがジェノサイドを始めたとしても、私の家族を殺したとしても彼らはルワンダ人なのです。私たちはルワンダで生活をしなければなりません。

Q.ジェノサイドのような出来事が二度と起きないためにあなたは何を考えますか？

A.すべてのルワンダ人がフツとツチのために和解をしようとすべきだと思います。なぜなら、私たちはルワンダ人であるからです。ジェノサイドが起きる前でさえも、私たちはルワンダ人でした。しかし、あなたがムランビやキガリのメモリアルで見たように、フランスは自国の利益のためにルワンダにやって来て、ツチとフツの二つに分けようとしてきました。そして、フランスはフツに「もしツチを殺したら、君は金持ちになれる」とふきこんだのです。フツは牛を持っていなかったため、社会的に地位が低かったのです。牛はルワンダでは力の象徴ですから。ツチはとてつとたくさん牛を持っていました。ジェノサイドが二度と起きないために、私たちルワンダ人は一つだと知らなければいけません。私たちはルワンダ人なのです。私たちは和解をしなければいけません。

Q.あなたは自分の母親がジェノサイドの生存者と言いましたが、あなたの母親はあなたに頻繁にもしくは時々、ジェノサイドのことを話しますか？

A.私の母は、追悼式に行くときトラウマに苦しめられます。母は、トラウマに苦しみながらも私にジェノサイドのことを話してくれます。「あなたが小さかった時、生まれたばかりのお兄ちゃんとお父さんは殺されたのよ」と話してくれました。でも頻繁にはありません。時々です。

Q.あなたの母親が時々しかジェノサイドのことを話さないのは、ジェノサイドについて話したくないからですか？もしくは思い出したくないからですか？

A.違います。ジェノサイドを忘れたいから話さないのではありません。なぜなら、あなたが自分の生まれた時のことを忘れたら、あなたは自分の将来を作れないからです。

自分たちの将来を築き上げていくために、私たちは過去に何があったのかを知らなければなりません。だから私の母はジェノサイドを忘れていません。あなたが自分の赤ちゃんを持った時、あなたも同じことをするでしょう。あなたは追悼式へ行って、時々思い出すでしょう。そして亡くなった人々を忘れないために写真を撮るでしょう。忘れたいからではありません。母が時々しか話さないのは、私が毎日追悼しないのと同じように、毎日話すというものではないのです。

Q. 将来のために、平和を築くために歴史を思い出すことは重要ですか？

A. 私たちは歴史を忘れることはできません。なぜなら、私たちの子供が歴史を、過去の出来事を知らなければならぬからです。人々が死んでいっても歴史は残ります。歴史は残り続けるのです。

Q. 私たち外国人にとって、ルワンダの第一印象はジェノサイドです。これについてどう思いますか？

A. ジェノサイドが起きたということは、信じられないことです。外国人は、どのようにしてジェノサイドが起きたのか、何が原因だったのかを知りたくて、興味を持つのだと思います。その場合、外国人は自国でそのようなことが起きることを防ぐために知りたいのではないかと私は思います。

Q. あるルワンダ人は私たちにルワンダ＝ジェノサイドと誤ってほしくなく、彼らは私たちにジェノサイドではないルワンダの他の面を知ってほしいと言っていました。しかしあなたはジェノサイドが二度と起きないために、私たちはジェノサイドについて考えることができるということですね？

A. はい。二度とジェノサイドが起きないために。

Q. だからあなたはジェノサイドを覚えていることは将来のためになると思うのですね？

A. すでに言ったように、将来を築きあげていくために、ジェノサイドのような争いを防ぐためです。なぜならジェノサイドは悪いものです。ジェノサイドは国家同士が争うものではありません。ジェノサイドとは、同じ国の人々、近所に住む人々、同じ人種、同じ色をした人々が殺しあうことです。信じられないことです。だから、他の国でもジェノサイドが起るのを防ぐために、世界中の全ての人がルワンダで起こったことを知ったほうがよいと思います。また、ジェノサイドと争い (fight) が違うことも知るべきだと思います。

Q. ツチにとってメモリアルに行くのはつらくはないと言っていました、なぜですか？

A. 私の母は、ムランビには祖父と祖母が眠っているとっていました。母にとって、メモリアルに行くことは、友達や祖母そして父に会うことなのです。

## ■男性・26歳・ルワンダ国立大学

Q.ジェノサイドが起きたとき、何才でしたか？

A.9歳でした。

Q.あなたは生存者ですか？

A.はい。少しだけ。

Q.あなたは小学校、中学校、高校でジェノサイドについて学びましたか？

A.はい。主に小学校と中学校で学びました。

Q.どう学びましたか？

A.メモリアルに初めて行ったのは、2007年でした。ジェノサイドについて授業では、当時のフツ政府によってジェノサイドは準備され、そして始められたということや、フツ、ツチ、トゥワは社会的地位が異なっていたといったことを学びました。社会的地位とは、農民はフツ、狩人はトゥワ、そして牛を持つものはツチということです。

Q.フツについてどう思いますか？

A.私にとって、フツは敵であるとは言えません。でも、ジェノサイドのとき彼らは悪いことをしたし、彼らのせいで、私は自分の友人や家族を亡くしたのだ、ということは分かっています。しかし、今の政府は和解に力をいれていて、今私たちは一つになろうとしています。それに、ツチとフツを見分けるのはとても簡単なことではありません。あなたは、私や他のメンバーを見て、すぐさまツチやフツだと見分けることができますか？私たちがさえ、区別するのは難しい。なぜなら、私たちは皆同じルワンダ人なのですから。あなたたち日本人とは違って私たちは一つの言語を話しています。それに私たちは同じ社会生活をしています。耕したり、農業をしたり、一緒に勉強だっているのです。

Q.ジェノサイドが二度と起きないためにあなたは何を考えますか？

A.再び起きるのを防ぐためには、現政府の決めたことを守ることが大事だと思います。なぜなら私たちの政府は、過去の過ちを繰り返したくないと考えているからです。だから、もし私がこの政府の決めたことを受け入れれば、それはジェノサイドを二度と起こさないための最良の方法となるでしょう。そして、私自身も、働くこと、勉強すること、そして自分の国を発展させることに対して、高いモチベーションを保っていなければなりません。フツ・ツチ・トゥワのことを考えるのではなくて。私はそういう過ぎた過去のことを考えたくないのです。なぜなら、もしそれについて考え続けたら、「ああ、こいつは私の家族を殺した家族の出身だ」と思ってしまうかもしれないから。そうしたら復讐のことを考えてしまうかもしれない。そういうことを考える代わりに、私は自分の将来や、自分の国の

未来について考えるのです。そうすることで、私はこの国を平和な状態に保つことに貢献していると思っています。

Q.ジェノサイドのことを話すのはつらくないですか？

A.そんなにつらくはないです。

### ■男性・23歳・ルワンダ国立大学

Q.ジェノサイドが起きたときあなたは何歳でしたか？

A.6歳でした。

Q.ジェノサイドについてどう学びましたか？

A.昨日あなたが見たように、メモリアルセンターに行けばたくさん情報が得られます。だから私があなたに伝えられるのは自分自身の経験です。ジェノサイドが起きたとき、私はキガリに住んでいました。ハビヤリマナ大統領の乗った飛行機が墜落したことを知ったとき、人々は何かが起きると感じていました。そしてツチを殺す時が来たのです。フツがツチを殺す理由は、ツチはエチオピアから来た移民でルワンダ人ではないといわれていたからです。ルワンダはセクターで区分されています。セクターは大変多いですが、私たちはツチであることのIDを持っていました。フツはセクターとIDをもとに殺す順番のリストを作っていたのです。私たちは5番目でした。ジェノサイドが始まってから三日目、私たちはキッチンに隠れていました。私の家の隣人はフツでした。彼らは「どこだ、どこにいるんだ」と大声で言っていました。彼らはすでに私たちがどこにいるのか知っていたのです。父は「ここにいるぞ」と言って外に出ていきました。そして彼らと話し合おうとしました。「何が起きたんだ。私は君たちと同じルワンダ人だ。なぜ私を殺すのか？もし金がほしいなら金を渡す。だから自由にさせてくれ。」父たちは言い争っていました。「わかった。もし君たちが私を殺そうというのなら私の家族は自由にしてくれ。家族を自由にしてくれるなら私を殺してもかまわない。しかし私の子供たちと妻には絶対に危害を加えるな。」そして父たちは大通りに出ていきました。聞いた話によると、ガチャチャ裁判（一般市民による簡易裁判）で父を殺したやつらが裁かれたそうです。父を殺したのはインテラハムウエでした。インテラハムウエは父を撃ち殺して、川に捨てたそうです。

私たちは場所を移そうとしましたが、外にはインテラハムウエがたくさんいました。

「そこで止まれ。お前たちはツチか？フツか？」と聞かれ、私たちの中で緊張が走りました。「私たちはフツです」と言うと、「違う！お前たちはフツではない！お前たちの顔はツチに似ている。IDを見せろ」と言われました。母はIDを持っていましたが、ツチだったので「持っていません」と答えました。するとインテラハムウエは私たちの持ち物をチェックし始めました。そして母がツチであることがばれてしまったのです。しかし幸運なことに、その場には父の大親友だった人がいました。彼はフツでしたが、インテラハムウエ

に「もしお前がこの家族を殺したら、私はお前を殺す」と言い、私たちはインテラハムウェから逃れることができたのです。しかし、その後生きていくのはとても大変でした。ジェノサイドが終息した直後も同じです。水はなく食べ物もなく仕事もありませんでした。また、私たちは常に緊張していたので人々の間の交流もありませんでした。何もかもが困難でしたが、死んだ父のためにも頑張っ生きて生きようと思いました。

Q.生活をするために助成金などはもらっていましたか？

A.奨学金が政府から支給されました。またジェノサイドで親を亡くした子供を支援する組織からももらっていましたし、全てのツチの子供たちに奨学金や学用品が支給されました。おかげで私たちは学校へ通うことができました。一生懸命勉強しました。なぜなら私たちは人生でとても大事なものを失ったのですから。しかし、問題はただ親を亡くしたことでなく、トラウマです。どうして自分の家族を殺した人を平気で見ていられるのでしょうか。トラウマのほかに、いまだに残っている問題は、イデオロギーです。子どもにイデオロギーを植え付けようとするフツの親もいます。「あの人たちには話しかけてはだめよ。彼らはツチで、あなたのお父さんを牢屋に入れた人たちなんだから」と。ジェノサイド後に生まれた子どもたちでさえ、イデオロギーを持っているのです。だから、ツチにとってはとても大きな問題です。彼らは必然的にあの当時に引き戻されてしまうのです。彼らは自分のお父さん、お母さんを思い出そうとするのです。このように今でも問題は続いています。

Q.フツについてどう思いますか？

A.今は、フツは自分と同じような人たちで、私たちは共に暮らしています。今、私たちツチとフツは1994年当時のような関係にはありません。しかし、和解について言わせてください。和解をする、平和を作る、交流する、関係を築くとただ言うことは難しいことではないし、「私たちはあなたたちを許します」と口では簡単に言えます。しかし心の底には、忘れられないものがあるのです。時が経過していくとともに私たちは生活を続けていくためにフツと関係を築いてきました。なぜなら、政府が国を作りあげていくためにルワンダ人として一つになることを強く推しているからです。国を盛り上げていくためにツチを気にかけて、ツチと一緒にやっていくというフツもいます。

私に言わせれば、1994年のことを振り返ってみて、肯定的な言葉で締めくくることはできません。「私はあなた(フツ)を許す準備ができていない。なぜなら私にとっての精神的、身体的なよりどころであった人たちは殺されたからだ」とフツを許していないツチも中にはいます。家族を殺されたということは、自分自身が殺されたも同然なのですから。

Q.あなたはクリスチャンであると言いましたが、ジェノサイドが起きたとき神はいると思いましたが？

A.神はいないと思いました。なぜなら神がいたら、人々が隣人や友人を殺すのを放ってお

くはずはないからです。殺された人々は「神よ、あなたはどこにいますか？」と言ったことでしょう。人々は安心や心の落ち着きを得るために教会へ行きます。教会へ行ってまさか殺されるなんて誰が思ったでしょうか。トラウマのせいで教会に行くことができなくなってしまった人もいます。教会だけではありません。モスクでも人々は殺されました。

Q.あなたは今神を信じていますか？

A.はい。信じています。

Q.ジェノサイドが起きないために、あなたは何を考えますか？

A.私たちは過去に起こったことをなかつたことにすることはできません。ジェノサイドは起こってしまったのです。ジェノサイドの後、生き残った私は、「自分は何ができるのか？」と自問しました。全ての人に普遍的なことを探そうとしました。全ての人が自分の目標を持っているように、私にも目標があります。それは父がしていたことを続けることです。父は社交的で優しく気さくな人でした。だから私は同じようになりたいと思います。去年の追悼式での大統領のスピーチを覚えています。「ジェノサイドを強調しないでください。もちろん心にはとどめておくけれど、過去を強調しないでください。未来に目を向けましょう。そして自分自身に問いかけてみてください。『あなたの夢は何か、誰になりたいのか』と。ルワンダにはジェノサイドで亡くなった多くのヒーローがいます。その人たちがどう生きていたかという点で、あなたたちは彼らから学ばなくてはなりません。過去に起こった歴史を心の内にとどめ、そしてその歴史から学ぶのです。ジェノサイドを心にとどめ、未来に目を向ければ、ジェノサイドは再び起きることはないでしょう。」

ジェノサイドが起こった一番の理由には政治的なイデオロギーがあったと思います。あなたはフツであなたはツチ、あなたはトゥワという風に民族に分けて、その民族の中で優劣をつけた。これは悪いイデオロギーでした。今ルワンダ人は自分たちの心に何をすべきかを問いかけていると思います。人を殺して何の得になるというのですか？何の得にもなりません。歴史から学ばなければいけないというのは、こういう理由からなのです。

## 5. 感想

前回の第8回本会議（日本招致）に参加したあるルワンダ人に「ジェノサイドばかりに目を向けなくていい。ルワンダはジェノサイドだけではないんだ！」と言われた。それ以来、ルワンダにジェノサイドの話を書くことはあまりできそうにないなと思ってしまった。ジェノサイドのことを書くのは一種のタブーであり、気軽に聞けるようなものではないしジェノサイドのことを聞きたいという興味本位の気持ちではいけないんじゃないのかとも思った。しかし、ルワンダへ行って、ルワンダ人の口からジェノサイドの話を書きたいというのは興味だけではなく、「どうしても聞きたい」という筆者の切実な思いもあった。実際ルワンダへ行ったら、自分が思っていたよりもジェノサイドの話をしてくれたルワン



ダンが多かった。むしろ、話したいと言ってくれる人もいた。また、ジェノサイドメモリアルに同行したルワンダンも多かった。

この企画はジェノサイドが終わって19年が経過した現在、ジェノサイドを経験した人と経験していない人とで、ジェノサイドに対する認識や考えに“差”ができていないか？という疑問から始まった。企画目的・経緯にはインタビューの対象は年齢の近い学生と書いてあるが、本当は年齢の近い学生が対象ではなく、学生ともう少し幅の広い世代を対象にする予定であった。経験した経験していないというだけではなく、世代に注目して、ジェノサイドのジェネレーション・ギャップを知ることが最初の目的だったのである。インタビューをする場所も教会やマーケットなどと複数あったのだが、ルワンダに着いて、ルワンダ側のリーダーと企画主旨の再確認をしていたときに、教会はインタビューができるような場ではないし、マーケットも実際難しいだろうということになり、最終的に学生にしかインタビューができないということになってしまったのである。

しかし企画は失敗だったというわけではなかった。当たり前のことだと思うかもしれないが、ジェノサイドに対する認識と考えの違いというもの、ジェノサイドを経験した、経験していないまたは覚えている、覚えていないとで違かった。経験した人は、ジェノサイドがトラウマとなる人が多く、精神的なダメージを抱えながらジェノサイドを考えることになる。一方経験していない人はトラウマのような精神的なダメージを抱えてジェノサイドを考えることはない。「身内を殺したフツを許せるか」「同じルワンダ人だと思えるか」インタビューに応じてくれたジェノサイドを経験した23歳の男性は口では簡単に身内を殺したフツを許せると言えるし、同じルワンダ人だと思えることができると言ったが、心の底では許していないし、同じだとは思えないと言った。ジェノサイドを経験していない20歳の女性はジェノサイドが記憶として残っていない。彼女はフツを許すことはできると言い、私たちは同じルワンダ人であるときっぱりと言った。両者は話すときの重々しさも違った。ジェノサイドの認識や考えの違いを「経験」に集約することはできないとは思わない。もっといろんな観点からジェノサイドの認識や考えの違いというものを考えることができる。また、インタビュー以外にもジェノサイドの話聞いた人数をカウントしてみても、たかが数人なのである。数人の意見を聞いたところで、「これが答えです」なんていうのはでない。

ただ、当初の目的であったジェノサイドのジェネレーション・ギャップを知るとまでいなくても、年齢が2、3歳違っただけでもギャップがありそうなことを知ることができた。筆者の企画はルワンダンなしでは始めることすらできなかった。日本人にジェノサイドのことを毎年聞かれ、辟易していたが、筆者のしつこさに折れ、またルワンダンの生の意見を聞くという企画の目的に賛同してくれたルワンダン、ルワンダではだめだけど日本になら、インタビューの詳細を公開してもいいよと言ってくれたルワンダンもいた。特にインタビューに応じてくれた3人には大変感謝している。(白川)

# アイスクリーム店 (Inzozu Nziza)

---

担当者：谷川 琴乃

## 1. 訪問日時・場所

日時：2月20日（水）11:00～12:30

場所：Inzozu Nziza（ブタレ ルワンダ国立大学から徒歩約10分）

参加者：小坂、白川、谷川、松本、Aline, Jean de Dieu

## 2. 企画目的・訪問の経緯

私がこのアイスクリーム店の存在を知ったのは、アルジャジーラのドキュメンタリーであった。ジェノサイドでの辛い過去を持っているはずの女性たちの笑顔と力強さが印象に残り、ぜひ訪ねて働いている女性たちから直接話を聞いてみたいと思った。インタビューの目的は、働くことが女性たちに経済的・精神的にどのような変化をもたらしたのか、そしてそれを彼女たちがどうとらえているかを知ることである。

## 3. 訪問先概要

Inzozu Nziza（意味：Sweet Dreams）は、2010年に開店したルワンダ初のアイスクリーム店である。働いているのは全員地元の女性で、女性ドラムグループのメンバーである。この店は、一人のルワンダ人女性と、アメリカに拠点を置くアイスクリーム店との協力で生まれた。アイスクリームを通して幸せを届けること、女性のエンパワーメント、経済発展を促進することを目標に掲げている。

【開店の経緯】2007年、アメリカのニューヨーク・ブルックリンで、2人の女性がアイスクリーム店 Blue Marble Ice Cream を開いた。2008年、脚本家のルワンダ人女性 Kiki（本名：Odile Gakire Katese）がアメリカを訪れた際、Blue Marble Ice Cream の創業者の一人、ジェニーに出会った。ジェニーがアイスクリーム店を経営していると知った Kiki は、「生きるために必要な基本的な栄養と同じくらい、ルワンダには人の心を元気にし、幸せを与えるものが需要だ。アイスクリームが幸せや喜びのシンボルとなるのでは」との思いから、ルワンダでも出店できないかと話をもちかけた。Kiki はルワンダ初の女性のみドラムグループ Ingoma Nshya を結成した女性でもあり、そのメンバーの女性たちを雇用することで、彼女たちが安定した収入を得られるようにすることも目標であった。そこで Blue Marble Ice Cream は非営利ベンチャーである Blue Marble Dreams を立ち上げて寄付を募り、Kiki と協力してルワンダ・ブタレに出店することが決まった。女性へのトレーニングや準備期間を経て、2010年6月に開店。現在は、首都キガリに2店目を開店準備中。

\* Blue Marble Ice Cream ホームページ <http://www.bluemarbleicecream.com/>

\* Blue Marble Dreams ホームページ <http://www.bluemarbledreams.org/>

#### 4. 当日活動報告

アメリカの本社 Blue Marble Ice Cream の社員で、現在ルワンダ赴任中の Laura Romano さんにお話を伺った後、Inzozu Nziza で働く女性 2 人にインタビューを行った。

### ■ Laura Romano さんへのインタビュー

#### Laura Romano さん

ニューヨークの本社 Blue Marble Ice Cream に勤めるアメリカ人。大学生のとき経済開発や女性のエンパワーメントについて学んでおり、多くのジェンダー政策があるルワンダに興味を持った。自分の地元ブルックリンにある Blue Marble Dreams の存在を知り、大学生の夏休み、Inzozu Nziza で 2 ヶ月間インターンシップを行った。



大学卒業後、またルワンダの女性と一緒に働きたいと思い、Blue Marble Ice Cream に就職。夏はアメリカで、冬はルワンダで働く。昨年 12 月にルワンダに赴任し、現在はスタッフのトレーニングや、キガリの 2 店目開店準備に携わっている。

#### 【店の基本情報について】

Q. スタッフについて教えてください。

A. 現在は 7 人。(調理スタッフ 4 人、アシスタントマネジャー 2 人、マネジャー 1 人)

マネジャーなどの役職は、トレーニング中の仕事の出来と面接で決めます。

最初は 12 人でしたが、引越し、子育て、学業などで辞める人が出て、7 人になりました。

ここで働いて稼いだお金で、今までで 2 人が大学に通えるようになりました。

スタッフの年齢層は 22 歳～50 歳。

Q. 給料は？

A. 調理スタッフは月給 50,000 ルワンダフラン (約 8,300 円)。マネジャーはそれ以上。

この額はルワンダでは教師の初任給と同じくらいで、高額なわけではないけれど、学歴がないことを考えれば高い方だと思います。

Q. どのようなトレーニングを行っていますか？

A. 英語、接客、衛生、経営 (店の経営だけでなく、自己管理も)、調理など。

英語レベルは個人差があるので、週に 2 回ほど個別レッスンをしています。

Q. 材料はどこから仕入れていますか？

A. 地域経済に貢献することも一つの目標なので、材料は全て地元の農家から仕入れています。牛乳はすぐ近くの農場から。果物や野菜は地元の市場で買います。エプロンや帽子、テーブルや椅子も地元の手工業者が作りました。また、地元の警備員も雇っています。

Q. 商品の価格はどのように決めていますか？

A. コストによって決めています。ものによっては高くなってしましますが、経営を維持す

るには仕方ありません。できるだけ価格の幅を広げて、大学生でも買えるようにしています。

Q.客層は？

A.大学生、家族連れ、旅行者、ビジネスマンなど。6, 7月は旅行者、2月は大学生が大多数。お客さんの多くが大学生なので、大学が休みの時期や雨の日は来店者が減っています。

#### 【店で働く女性たちについて】

Q.働く中で女性に変化は見られましたか？

A.もちろん。私が一緒に働いてきた女性はほとんど教育を受けておらず、高校さえも出ていませんでした。しかし、働くことは女性に大きな変化をもたらしました。例えば今までで2人が、ここで働いて稼いだお金で大学に行けるようになりました。また、精神的にも変化がありました。先月、新たにアシスタントマネジャーを選ぶことになり、ある女性に「あなたには才能があるから」と薦めたのですが、始めは「私はまだ力不足だからそんなことはできない」と言っていました。でもその彼女は今ではアシスタントマネジャーとして自信を持って働いています。

Q.ルワンダ人女性についてどう思いますか？

A.とても強いと思います。一生懸命働き、ビジネスをよく理解しています。スタッフミーティングでは、全員が議題を挙げ、意見を言います。お金の無駄遣いは絶対にしませんし、何事も真剣に取り組むルワンダ人女性に私は日々感銘を受けています。

Q.女性のエンパワーメントにおいて何が重要だと思いますか？

A.教育や仕事を通じてのはげましが必要だと思います。女性は男性と同じ能力を持っているのに、機会を与えられていないだけなのです。教育の機会がなかった人も、この店の仕事を通じてさまざまな技術を身につければ、この店を出たあとも何でもやっていけるようになると確信しています。

Q.女性たちにジェノサイドによる影響を見たことはありますか？

A.ジェノサイドの影響はルワンダにおいてとても顕著ですが、この店は女性たちに多くの苦難から逃れるための安全な場所を提供してきたと思います。例えば、ここで働く女性の一人はジェノサイドで孤児になり、人生で数えきれないほどの苦難を経験してきましたが、店で他の女性に囲まれているとき、彼女はいつも踊って笑っています。ジェノサイドによる精神的ダメージや困難は、私の人生と比べられるものではないので、彼女たちの状況を完璧に理解しているわけではないけれど、この店は彼女たちを癒す手助けをしていると私は信じています。

## ■女性店員へのインタビュー

■Marie Louise INGABIRE さん (25 歳)

マネジャー



Q.この仕事についてどう考えていますか？

A.この店で働くことをとても楽しんでます。新しいものをこころワndaにもたらせてくれるこの店が好きです。特に女性にとっては、技術の向上、他の女性店員や業者との関係作りなど、多くを学ぶ機会を与えてくれます。とても良いことだと思います。

Q.どのようにしてマネジャーになったのですか？

A.開店の際に試験と面接を受けました。この店を生んだ **Blue Marble Ice Cream** はアメリカにあるので、英語の試験があります。私は英語を中学校から学んでいます。

Q.家族について教えてください。

A.弟とその妻、その子どもと住んでいます。私自身は夫はいませんが、赤ちゃんがいます。

Q.あなたの収入は、子どもを育てるのに十分ですか？

A.ある程度は助かりますが、十分ではありません。十分でない理由は、私が大学で勉強しているので学費を払う必要があるからです。

Q.あなたはこの仕事から何を学びましたか？

A.多くのことを学びました。この店は、ジェノサイドの後、多くの問題を抱えるルワndaで開店しました。多くの未亡人、孤児、たくさん問題であふれていました。だから私たちは幸せを与えてくれる何かを必要としていたのです。私たちが一緒に何かをすることで、いく分か幸せを感じることができました。ここで働くことで、例えばどのように人を動かすかなど、多くのスキルを得ることができました。難しいことですが、今私はそれらのスキルを習得したと実感しています。周りの人にフレンドリーであること、経理の仕方、他の女性店員と一緒に働くことなども学びました。同時にそれをとても楽しんでます。そしてもちろんアイスクリームの作り方も学びましたし、アイスだけでなくケーキなど他の多くの商品の作り方も学びました。

Q.スタッフミーティングについて教えてください。

A.毎週木曜日に開いています。この週の反省点、次の週に何ができるか、お客さんの反応、昇進の発表など、多くのことを話し合います。

Q.この店の目標の一つが、女性の精神的なエンパワーメントだとお聞きしましたが、その目標は達成されたと思いますか？

A.はい。ジェノサイドの直後は、貧困が蔓延していましたが、この店は私たちが利益を得る手助けをしてくれました。また、ジェノサイドの被害者もいれば加害者もあり、私たちは同じではありませんでしたが、この店は和解や結束に貢献したと思います。そして、私たちは時々ルワンダで起きたことを考え、どうしてそれが起きたのか、二度と起こさないためには何ができるかを考えます。この店は、私たちに利益を得ること以外のことも教えてくれたのです。この店に来る業者が、お客さんをいつも笑顔でもてなす私たちを見て、「なぜあなたたちはいつも幸せそうなんだい？」と尋ねます。だから私は「今私たちは結束していて何の問題もないからよ」と答えるのです。

Q.あなたはこの店がルワンダの復興に貢献していると思うのですね。

A.そう願っています。現在私たちは、もう一つの店舗を首都キガリに開く準備をしています。可能性がある限り、ルワンダのあらゆる場所に店舗を置き、アイスクリームやケーキの作り方も教えたいと思っています。また、私たちはドラマーなので、子どもたちにドラムの演奏方法を教えたいとも考えています。

Q.週何日働いていますか？

A.週5日です。

Q.仕事と子育てと学業を同時にこなすのは大変ではないですか？

A.とても大変ですが、何とかこなしています。私は朝8時から夕方5時までここで働き、6時から10時まで大学で勉強します。帰宅すると子どもはもう寝ています。だから子育てはとても難しいのですが、仕事のない日は家にいるよう努力しています。

Q.働いていて一番楽しいことは何ですか？

A.たくさんありますが、接客が好きです。また、経理も好きです。なぜなら収入や支出を知ることができるからです。とても楽しんでます。

Q.この店で働き始めてから生活はどのように変わりましたか？

A.多くの変化がありました。働き始める前は、お金や洋服などの物を家族が与えてくれるのを待っていただけでした。しかし、働き始めてからは自由に生活できるようになりました。今は自分で必要なものを買って、子どもの世話をすることができます。また、この店で働いて貯めたお金で、昨年からは大学に行けるようになりました。勉強するのが好きなのでとても幸せです。

Q.以前より自信が付きましたか？

A.はい。ここで働いているとき、すべきことができていると実感します。働いていると、女性たちの力を感じることができます。以前は、このように仕事をしたり、商品を作ったりすることができる女性はいないと誰もが思っていました。しかし、私たちがここで働くことで、女性は多くのことができるのだとすべての人に示せていると思います。

Q.あなたの夢を教えてください。

A.たくさんありますが、まず大学を卒業することです。そして、自分でビジネスを始め自分の店を持つのが夢です。また、良い生活を送れるようになりたいです。良い生活や十分な収入を得られたら、私は孤児が好きなので、彼らにビジネスなどさまざまなことを教える孤児のための学校を創りたいです。彼らが楽しめて、かつ収入を得られるようになる学校にしたいです。

---

■ Eugenie KAMAGAJU さん (50 歳) \*通訳 : Marie Louise さん  
調理スタッフ



Q.この仕事についてどう考えていますか？

A.ここで働くことができるととてもうれしく思います。

Q.あなたはこの仕事から何を学びましたか？

A.まず、他の人との関係作りを学びました。また、アイスクリームや他の商品の作り方など、それまで知らなかった多くのことを学びました。

Q.家族について教えてください。

A.夫、3人の子ども、亡くなった姉の4人の子どもと暮らしています。

Q.この仕事に就く前は何かをしていましたか？

A.市場で働いていました。その後 Ingoma Nshya (女性ドラムグループ) に入り、この店で働き始めました。

Q.週何日働いていますか？

A.週4日です。

Q.あなたが働いていることについて、あなたの夫はどう思っていますか？

A.私は子どもの世話や、子どもの学費を払うのを助けているので、彼は私が働いているこ

とを良いことだと考えています。

Q.この店で働き始めてから生活はどのように変わりましたか？

A.子どもの学費を払えるようになったことが一番の変化です。

Q.以前より自信がつけましたか？

A.はい。なぜならお客さんが求めていることに対応できるようになったからです。今は接客をとっても楽しんでいきます。

Q.あなたの夢を教えてください。

A.この店をもっと大きくして、ルワンダの 5 つの全ての地域に広げることです。また、自分の家庭の生活をよりよくすることです。

## 5. 考察

「働くことが女性にどのような変化をもたらしているか」について、インタビューで分かったことを以下にまとめた。

- ・技術（接客、調理、経営、英語など）を身につけることで、自信が生まれる。また、別の事業をする場合その技術を生かすことができる。
- ・経済的に自立することで、選択肢が増え、自分のやりたいこと（学業、起業など）を実現する可能性が広がる。
- ・子どもの学費を払えるようになることで、子どもの教育機会にも良い影響を与える。
- ・働くことで、他の女性にとってのロールモデルとしての役割を果たす。

## 6. 感想

ルワンダはジェンダー政策に力を入れている国として有名であり、その例として高い女性議員の割合がしばしば引き合いに出される。それ自体はとても意味のあることだ。しかし、女性の議員が過半数を上回れば、それは国において男女平等が達成されたことを意味するのだろうか。政策は、実生活に反映されるかどうかが重要だ。その意味で、今回女性たちに直接インタビューし、生活についての生の声が聞けたことは、とても良い経験だった。

最も印象的だったのが、インタビューした女性たちの笑顔である。学んだことや生活の変化を笑顔で話す様子から、本当に働くことが楽しい、というのが伝わってきた。ここで、何でも日本と比較するのは良くないが、「働くこと」に対する私のイメージは良くはない。日本で電車に乗っている疲れた顔のサラリーマンを見ると、働くって楽しいのかな？と疑問に思わざるを得ないし、自分が社会に出て働くことに不安を感じてしまう。それに対し、インタビューした女性からは、知らなかったことを知って習得する達成感・そこから生まれる自信・自分の生活も家族の生活も改善する喜び、これらが素直に伝わって来て、働く



という行為の本来あるべき姿を見た気がした。

特に、若くしてマネジャーを務める Marie Louise さんに感銘を受けた。朝から夕方まで働き、そのあと夜遅くまで大学で勉強し、同時に子育てもこなす彼女を、一人の女性として尊敬する。こんなにもやる気があって、努力家で、物事に真剣に取り組む彼女が、もしこの店に出会わなければ、理不尽な人生を送っていたかもしれない。やる気と努力が報われる社会にしたいという、社会を変えることに私が興味を持った原点を思い出させてくれた。彼女に夢を尋ねたときの、はじけるような笑顔が忘れられない。

また、Blue Marble Dreams のこのプロジェクト自体にも感銘を受けた。ただ女性を雇うだけでなく、トレーニングや教育の機会も与えている点、全ての材料を地元の生産者から仕入れることで、地域経済の活性化にも貢献している点において、この店はとても重要な存在である。JICA は一村一品運動促進の一環として Inzozzi Nziza を支援しているそうだ。このような支援がもっと広がることを願う。

Inzozzi Nziza は、現在 7 人の女性に変化をもたらしているといえる。7 人と考えると、国全体にとっては小さなことかもしれない。しかし、一人ひとりの女性にとっては大きな変化だ。社会におけるこのような小さな積み重ねの結果、女性の生活を経済的にも精神的にも豊かにし、女性の働き方の常識を変え、実質的な女性の社会進出、一人ひとりが能力を発揮できる社会が実現するのではないだろうか。この見方は楽観的すぎるのかもしれない。しかし、実際に女性の声を聞き、働く姿を見てみると、「この女性たちは社会を変える力を持っている」と、単なる希望ではなく、確信に近く、そう感じたのである。

最後に、インタビューに協力してくださった Laura さん、Marie Louise さん、Eugenie さんに、心より御礼申し上げます。(谷川)



(左)笑顔で迎えてくれたスタッフ。

(右)月 1 回子どもにアイスクリームを無料で配る日のための募金箱が置いてある。



(左)牛乳を届けに来た地元の業者。

(右)アイスクリーム(チョコチップ)。他にもサンドウィッチやオムレットなど軽食も食べられる。



# PIASS

---

担当者：小坂弘奈

## 1. 訪問日時・場所

訪問日時：2月20日（水）18:00～20:00

場所：ブタレ、Protestant Institute of Arts and Social Sciences（以下 PIASS）

参加者：小坂、谷川、白川、松本、Eugene, Valence Muvara, Cynthia, Alex, Blaise,  
PIASS 平和学科の学生

## 2. 企画目的

私たち日本ルワンダ学生会議が行っているような議論を、日本ルワンダ学生会議以外の人々とも行うことでより幅広い問題意識のもと、深い議論ができるのではないかと期待から今回の企画に至った。ルワンダではじめて設立された平和学科で学ぶ学生たちが平和についてどのように学んでいるのかを知りたいという考えから、PIASS で教員として働く日本人、佐々木和之さんに本企画を依頼した。



## 3. 訪問先概要

ルワンダ国立大学から歩いて 30 分程の場所にある PIASS。この学校では平和学科がルワンダで初めて設立された。今回そこで教員を務める佐々木和之さんに協力いただき、この企画は行われた。企画は自己紹介から始まり、互いの活動内容の発表、そして最後には平和をテーマにフリーディスカッションを行った。

## 4. 当日活動内容

企画のはじめには全員の自己紹介、そして日本ルワンダ学生会議についてルワンダメンバーの Eugene からプレゼンを行った。続いて PIASS 学生である Serge から彼らが学ぶ平和について発表。積極的平和や消極的平和といった日本でも国際関係の授業で学ぶことと似た内容を学んでいた。さらに、平和と許しの関係、和解の重要性など、キリスト教的視点から考えた平和など、特定の信仰心を持たない日本人が普段生活しているなかではなかなか発想し難いテーマもあった。

PIASS の平和学科では、争いの原因や解決法を探究するだけでなく、彼らのイメージする平和をアートで表現することに挑戦していた。今回彼らは歌と絵を披露してくれた。まずは平和学科の 2 年生たちが「平和」をテーマに作った『We Need Peace』という曲を生演奏。曲のサビ部分は「私たちは平和を求めている。さあ手を取り合おう。私たちは平和

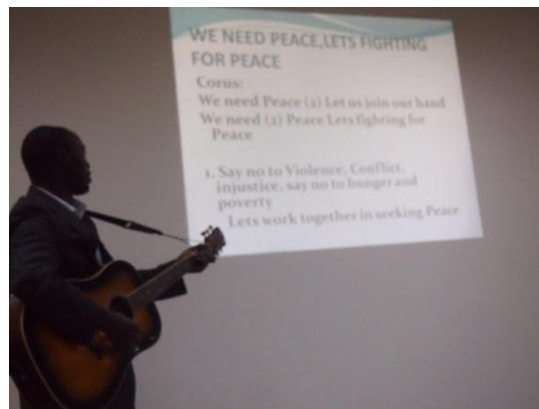
を求めている。平和のために戦おう。」といった内容である。次に彼ら描いた絵の説明を受ける。絵は丘へ向かって架かる橋に大勢の人々が丘を目指して渡ってゆく姿が描かれていた。彼らによると、橋は平和を、丘は希望と苦難を表していた。

企画の終盤には平和をテーマにフリーディスカッションが行われた。内容は質疑応答を含めたもので、ある学生は現在自分が平和を求めていることについて「深い闇を経験したからこそ、平和の大切さに気がついた。現在のルワンダを伝えたい。」と述べた。彼らからは日本においてアメリカが基地を保有していることや、領土問題についてなどなかなか鋭い指摘や質問もあり、意見交換が盛り上がる最中だが、企画終了予定時刻の午後 8 時を過ぎてしまったため企画はここで終了となった。

## 5. 感想

【担当者感想】私は大学で国際関係、特に平和学を学んでいるため、今回の企画は私にとって非常に興味深いものであった。ジェノサイドという信じがたい悲劇を経験から 19 年経った今、彼らにとって平和とはどういうことなのか。彼らのルワンダでの学びは私が日本で学んでいることと同じであったため、私はもっと議論したかったのだが、自分の専門的な英語の知識がなかったため思うことをうまく伝えられなかったのが非常に悔しかった。英語で自分の平和への想いを伝えられるようにスキルを磨き、ぜひともリベンジしたい。また、企画終了後、PIASS の学生たちが「君たち日本人と平和について共に考えることができ良かった！これからもこの交流を続けていきたい。」と言われたことが私は嬉しかった。日本とルワンダ、遠いこの二国間だが、インターネットなどを通じて意見交換を続けることが出来れば、この企画は大成功だったと言えるのではないか。(小坂)

【参加者感想】紛争(conflict)は、平和構築や紛争処理の世界だけでなく、どこにでも見られる自然なものであり、2 人の人間が存在さえすればどこにでも起こりうるものだ、と彼ら (PIASS 学生) は述べていた。しかし、紛争は、今起こっている問題への解決策を見つけるためのきっかけともなりうる。(Alex 谷川訳)



平和をテーマに描いた絵と彼らが作った歌を紹介する PIASS 学生

# 教会

---

報告者：白川 千尋

訪問日時：2月17日（日）9:30～12:30

場所：ルワンダ国立大学 スタジアム

参加者：小坂、白川、谷川、松本、Valence Muvara

## 訪問の目的・経緯

ルワンダでは多くの人がキリスト教を信仰している。日本では仏教を信仰している人、または無宗教であると主張する人が多い。日曜日のミサ・礼拝に行き、信仰をもつ人々に囲まれ、お祈りをしている姿を見ることで、「信仰とは何か」「神様を信じるとはどのようなことか」といった、宗教とは何かを考える。また、宗教が与える考えの違いや日本とルワンダの文化の違いを知る。

## 訪問先概要

教会という建物そのものではなく、大学内にあるスタジアムのスペースを利用して礼拝を行っている。10段ほどのコンクリートの階段に、大学の授業で使われたと思われるプリントを敷いて座る。10名ほどの学生リーダーが礼拝を取り仕切っていた。私たちが行った礼拝はバプティズムというプロテスタントの宗派の一つであった。バプティズムとは洗礼という意味であり、イエスが水に浸かり信仰告白をしたのと同じようにすることである。

## 当日活動報告

礼拝では、学生が「神様のおかげで友達と家族が学費を払ってくれて学校に通うことができている」「去年不幸があつて死にそうになったが、今生きているのは神様のおかげ」などと、日常で起こった良いことを報告していた。また、神様が自分たちのことをどれだけ祝福しているかを劇で表現したり、歌を数曲歌ったりしていた。例えば劇の一つに礼拝にちゃんと行ってお祈りをしに来るけれど、教会の外ではストリートガールと遊び、お酒やたばこをする人がいるというように完全には信仰していない人についてどう考えるのかといった内容もあった。礼拝の後半では、別の教会から来たという牧師からのお話があった。

## 感想

初めて礼拝に参加したが、何よりも印象的だったのは礼拝の終盤で参加者が一心不乱に神様にお祈りをしていた姿である。目をつぶり、ひたすらお祈りをしている姿に目を奪われた。またその姿が奇妙にも思われた。信仰とは何であろうか？1月には神社へ行き、12月にはクリスマスをし、お葬式はお坊さん呼んで念仏を唱えてもらって火葬をする。宗教に寛容な日本において、一つの宗教を生業信仰し続けるということがわたしには理解でき

なかった。また「神様のおかげで友たちと家族が学費を払ってくれて学校に通うことができている」という神様に対する感謝も、「それは友達と家族のおかげでしょ」と言いたくなかった。信仰をもたないわたしにとって、自分に起こった良いことを全て神様のおかげとすることや神様のおかげで自分は生きていくことに違和を感じたが、信仰を持っている人たちを見て感動したと同時にうらやましく思えた。なぜなら神様から自分がどれだけ愛されているかを劇や歌で表現する姿、一心不乱にお祈りをする姿が大変美しかったからである。(白川)

十字架のネックレスを身に付け、家に入ると壁にはマリア様の絵が掛けられ、タクシーに乗ればマリア様のキーホルダーがぶら下がっている。ルワンダに来てさまざまな文化の違いを見てきたが、一番大きいのはキリスト教文化だと思う。日常的な話で盛り上がるルワンダメンバーとの間でも、「神様を信じている」という会話になると、ふと隔たりを感じることもある。単なる文化の一側面とってしまうには、この地で宗教はあまりにも深く人々の生活に根を下ろしている。

日曜の朝、道でばったり会ったルワンダメンバーにどこに行くのか尋ねると、教会に行くのだと答えた。ほとんどの学生が毎週教会に通うという。授業のない日曜日の朝、早起きして教会に足を運び、同じ場所に3時間以上もとどまっていることを考えると、そこまで彼らを動かしているものは何なのだろうと、信仰を持たない私は素朴な疑問を抱いた。

日本では、宗教は犯罪などネガティブなイメージで語られることもあり、宗教に対する偏見は存在する。私も何か一つのもの信じることは「危険だ」と直感的に思ってしまう。でもこの教会にいた人々の神に祈る姿を見て、私は純粹に「美しい」と感じた。彼らは、自分より何百倍も大きな絶対的な存在を信じ、感謝し、全てを委ねていた。

ふとジェノサイドのことを思った。それまで仲良くしていた隣人が、ある日突然自分を殺しにやってくる。助けてくれると信じて逃げ込んだ教会でも、殺戮は起こった。多くの裏切りや不信を経験した人たちにとって、何かを「信じる」という行為はどんなに大きな意味を持つのだろうか。私は想像することができない。信仰とは何なのか。何か一つのもの信じることは何を意味するのか。これから考え続けることになりそうだ。

ここアフリカの地にキリスト教をもたらした当事者であるヨーロッパでは、現在、若者の教会離れが進んでいるという。宗教のあり方と国の発展とが関係があるかは分からないが、今から何十年か経ったとき、ルワンダで信仰の形がどう変化しているのか確かめてみたいと思った。(谷川)



手拍子をしながらかっているときの様子。  
このとき感じた一体感、幸福感は忘れられない。

# King's Palace

報告者：松本 万里子

訪問日時：2月19日（火）14:20～16:30

場所：King's Palace（ニャンザ郊外）

参加者：小坂、白川、谷川、松本、Eugene, Fils, Kizito, Nadine

## 訪問目的

植民地支配以前と以後のルワンダ王が住んでいた住居が再現されており、ルワンダの歴史について学ぶことができると考えたため、訪問した。

## 訪問先概要

King's Palace には、植民地支配以前と以後のルワンダ王が住んでいた家が、再現されており、実際に中に入ることができる。また、古くから富や権力の象徴とされている牛が飼育されており、直接触れ合うことができる。実際に触れ、ガイドの説明を聞いたり、パネル展示を見たりしながら、ルワンダの歴史について学ぶことができる。

## 当日活動報告

14:20 到着・受付

14:45 見学開始

16:30 終了

受付で、撮影料がかかると言われたため、見学中写真撮影は行わなかった。よって、各自メモをとった。

まず植民地支配以前、王国時代の王の家を見学した。この時代の王の家は、主に3つの建物で成り立っていた。1つ目は、王が生活する住居。靴を脱ぎ、入口向かって左から中に入ると、日本でいうところの畳のようなものが敷いてあった。匂いは畳そのもので、初めて訪れたはずなのに、何か懐かしい気分になった。家は底が広い円錐のような形であり、家の中心には火を起こす装置があった。そして、壁沿いに寝室がつくられていた。この住居は、3つの中で、最も広い住居であった。2つ目は、乳母が住む住居。家の造りは王の家と同じであった。中には、ヨーグルトを作るための、ひょうたんのような大小様々な容器が置いてあつ

↓メンバー(小坂)によるメモ



た。乳母はこの家に一人で住み、乳母以外がこの家で寝泊まりすることは許されないなど、様々な制約があった。3つ目は、ビアハウス。この家には、ビールを作ったりビールを毒味したりする男性が住む。家の大きさは、乳母の家と、さほど変わらない。ガイドによれば、この家に住む男性は、毎日一日中ビールを作り飲んでいたため、アルコール中毒に陥っていた人が多かったということである。

次に、飼育されている牛を見学した。牛が飼育されている場所では、写真撮影可能であった。牛に触れていると、どこからともなくカウボーイが現れ、我々のために、牛に捧げる歌を披露してくれた。どの牛も角が立派であった。

最後に、植民地支配以後の王の家を見学した。家の造り・外観は現代的で、家の中には、高級そうな家具がたくさん置いてあった。地下室があり、それは冷蔵庫の役割を果たしていた。ところどころパネル展示があり、ルワンダの今昔について、知ることができた。



↑ 飼育されていた牛たち(左)と、カウボーイと写真を撮るメンバー(右)

## 感想

見学をした中で、一番興味深かったのは、王国時代の王の家であった。家の造りは、シンプルであったが、生活しやすいところどころ工夫がされていた。また、ビアハウスがあることに驚いた。王国時代から、ビールは、生活に欠かすことのできないものとなっていたのである。また、王の家での生活には、様々な規則があったため、当時暮らしていた人々は、精神的に窮屈な思いをしていたのではないかと考えた。

牛が飼育されていることにも、驚いた。カウボーイの歌は、メロディーが独特で、とても印象的であった。さらに、その歌を聞いていたルワンダ人メンバーが、牛のポーズをとりながら踊っていた。私はそのとき、ここはルワンダなのだなど、改めて感じた。

ただ見るだけでなく、実際に触れたことで、ルワンダの歴史を楽しみながら学ぶことができた。ガイドの方の説明も分かりやすく、とても親切な方であったため、いろいろな話を聞くことができた。ただ、時間の都合上、最後の方はゆっくりと見学ができなかったため、その点だけ、残念だった。(松本)

# ピースコンサート

---

報告者：谷川 琴乃

日時：2月22日（金）19：30～21：45

場所：ルワンダ国立大学 大講堂

## 開催経緯

きっかけは2009年12月、第3回本会議中に東京で開催した日本文化とアフリカ文化の交流を目的とするダンスイベントにさかのぼる。音楽やダンスなど文化によって人々の一体感を作り上げられることを実感し、翌年ルワンダでの第4回本会議で、INDANGAMUCO (JRYCルワンダメンバーが所属する伝統ダンスグループ)と共にピースコンサートを開催することとなった。「平和」をテーマにしたのはかつて虐殺が起こったルワンダの地で世界平和を願ってパフォーマンスをすることは非常に意味があることだと考えたからである。(詳細は第4回本会議報告書参照)

今回の第9回本会議でのピースコンサートは、第8回本会議中に行われた議論の結果、take action (ルワンダへの社会貢献) として開催することが決定した。

## ピースコンサート概要

3000人近くの観客の前で、INDANGAMUCOのダンス・歌のパフォーマンスや、別のダンスグループのパフォーマンスが披露された。日本人は日本の歌2曲(「上を向いて歩こう」、「涙そうそう」。歌詞の説明もした。)に加え、ルワンダ国歌を暗唱し披露した(1番のみ)。コンサートの最後には、INDANGAMUCOのダンスに日本メンバーも加わり、共にダンスを踊った。

## 感想

INDANGAMUCOは合計6種類ほどのダンスを披露したが、そのたびに衣装や小道具などが変わり、飽きることがなかった。ダンス自体も、力強いものからゆったりした優美なものまで多様な動きが組み合わさっており、その動き一つひとつは、鳥肌が立つほど美しかった。INDANGAMUCOとは「文化を伝承する者」という意味だそうだ。ダンスを踊っているときの彼らのとびっきりの笑顔を見ていると、伝統文化であるダンスへの愛と、文化を伝えることの誇りが伝わってくる。

日本人のパフォーマンスに関しては、日本の歌への観客の反応があまり芳しくなく残念であったが、ルワンダ国歌を歌い出すと、観客が驚いて盛り上がるのが分かった。最終的に大きな拍手をいただくことができ一安心であった。ルワンダ国歌は、歌詞はもちろんキニヤルワンダ語であるし、メロディー自体も単純ではないため覚えるのに苦労したが、練習してきた甲斐があった。国歌を教えてくれたルワンダメンバーにも感謝。



今回のピースコンサートは、ルワンダの人たちに平和へのメッセージを伝えることができたかは疑問が残った。また、当日のスケジュール管理など反省点はあった。しかしパフォーマンス自体には、どう感動したかを言葉にうまく表せないが本当に感動した。素晴らしいルワンダの文化を伝承してくれた INDANGAMUCO メンバーに感謝したい。(谷川)



男性ダンサー。頭の上のかごには CORDIALITY の文字。



日本人は浴衣を着て歌った。



トラ柄の衣装を着た女性ダンサー。この他にもピンク・黄緑・紫・黒・黄色など多様な色の衣装を着て現れた。



歌い手たち



コンサート終了後、控え室でポーズをとるダンサーたち

## ルワンダメンバー宅・ホームステイ体験記

---

■ユジーン家（小坂弘奈・白川千尋）2月14日

筆者：白川

ユジーンの家はキガリにあり、丘を登ったところにあった。ユジーン家に行く途中、見慣れない色をした人間が車に乗っていることに興味をもった子供たちが車を追いかけはじめ、車を小突いてくる。そんなに私たちが珍しいか！と思う反面、危ないから！と思い爆笑してしまった。

ユジーン家はレンガの塀で囲まれて表門まであり、周辺の家と比べて裕福そうな感じがした。中にはいると、なんとハウスボーイがいたのだ！ハウスボーイと聞いて何かマイナスイメージを抱いてしまった小坂と筆者は驚いてしまった。彼は筆者たちの荷物を部屋まで運んでくれた。ユジーンはブタレの大学で寮生活をしているので普段はキガリの実家にはいないので、お母さんのオデットと妹のナディヤ、そしてハウスボーイの三人暮らしだそう。お父さんは1994年に起きたジェノサイドで亡くなったそう。

まず筆者たちは妹のナディヤとお互いを紹介しあった。ナディヤは高校生でダンスが好きで、大学生になったらユジーンが所属しているダンスグループのインダンガムチョに入りたいそう。ナディヤは親戚の写真まで見せてくれて紹介してくれたが、とにかく多すぎて覚えきれなかった。写真をみて気づいたのだが、子供のころは女の子も男の子も髪の毛は同じで、顔もいくらか似ていて性別の見分けがつかなく、衣服を見て女の子、男の子の区別ができるという感じであった。

お母さんのオデットはちょっとシャイで笑顔がかわいかった。英語よりもフランス語のほうが得意みたいであり会話することができなかったが、オデットがその場にいると何か温かい雰囲気が漂いはじめたように思えた……。それだけ、安心感というベールを包んでいるように感じられたのだ！！（あくまで筆者の個人的な感想です）

そして、気になる存在であったハウスボーイ。彼はキニヤルワンダ語しか話せなかったため本人から話を聞くことはできなかったが、ユジーン曰く、オデットがストリートチルドレンであった彼にハウスボーイをやらないかと話しかけて雇ったそう。給料は一か月で10000RWF（日本円で約1666円）と高額な方らしく、一日中働き、休憩はとりあえずやることが終わったらとれるのだという。もちろん学校には通っていない。筆者たちがホームステイしたとき、彼は夜の23時ごろまで働いており、朝はシャワーの準備をするために6時ごろから働いていた。ルワンダではハウスボーイやハウスガールが家庭にいることは普通らしく、比較的裕福な家には一人はいるという。筆者がハウスボーイの存在にマイナスイメージを抱いてしまった理由は、学校に行けずに一日中働かなければいけない、あまり自由がないというものからきていた。なによりも自分と年の近い人が学校に通わず、誰かの家に奉仕しているというのに違和感を抱いた。This is not Japan というのを感じた。

夕食はハウスボーイが作ってくれたごはん、牛肉とバナナ（甘くない）と野菜（漬物の甘いバージョン）で美味しかった。お肉がとくにおいしかった。そしてルワンダに来たら必ず飲むと決めていたバナナビールとバナナワインを嗜んだ！バナナビールはタバコみたいな何か煙った後味がして、おいしくはなかった（笑）一方、バナナワインはドロップとしていたがフルーツジュースみたいな甘さがあった。バナナビールとバナナワインの他に、プリモスビールというルワンダ産のビールも飲んだ。これは日本のビールと変わらない味でちょっと辛口であった。個人的にバナナ系のお酒よりもプリモスの方が好きである（笑）

酔いもまわってきたところで就寝。筆者と小坂はナディアの部屋で寝させてもらった。そして朝。いつもは時間を気にしないユジーンに急かされ居間に行くとオデットがルワンダティーを準備してくれていた。ルワンダティーはミルクと砂糖をそんなにいれんの！？と思うほどいれるのが普通と聞き、少し警戒していたが、すごく美味しい！そこまでの甘さは感じられず、日本の紅茶〇伝の方が甘いと思った。なによりも淹れたてなのがよくて、これだけでお腹がいっぱいになってしまった。

別れの時間・・・ お見送りにオデット、ナディアそしてハウスボーイ（荷物を運んでくれました）も来てくれて、写真を撮ってお別れをしました。初めて経験したホームステイがルワンダでした。アフリカのルワンダで人生初のホームステイができて、また、日本にはないことも知れてよい経験となりました。



## ■アイリーン家 (谷川琴乃・松本万里子) 2月14日

筆者：谷川

松本と私の2人は、2月14日の夕方から15日の朝までアイリーン(Irene)の家でホームステイをした。アイリーンはルワンダ国立大学の農業ビジネス専攻の1年生で、明るく積極的な20歳の女の子である。彼女は高校までキガリで過ごし、大学からはブタレで寮生活をしており、週末には時々キガリにあるこの実家に帰ってくるという。両親は小さな食料品店を経営している。まず店の中にいたお母さんが私たちを暖かく迎えてくれた。英語はほとんど話さないが、笑顔や話し方から優しい人柄が伝わってきて、すぐに好きになった。店の横にある壊れかけたトタンの扉を開けて奥に進むと、家がある。アイリーンの部屋、居間、風呂場、両親の部屋、子ども部屋など5部屋くらいあるように見えた。玄関のドアは壊れかけていて家自体も頑丈ではないが、清潔に保たれていると感じた。部屋の壁は水色に塗られていてとてもかわいい。居間に通され、お母さんがピーナッツとレモン味のファンタを出してくれた。お母さんが店に戻っていくと、アイリーンが突然、お母さんはジェノサイドの生存者であると話し出したので、少し驚いた。彼女はお父さんをジェノサイドで亡くし、今のお父さんはその後お母さんと再婚した人だと教えてくれた。その日は昼に皆でジェノサイドメモリアルを見学した日だったから話してくれたのかもしれない。その後は、家族のことや学校のことなどを話した。彼女には妹2人と弟が1人おり、上の妹はブタレの全寮制学校に行っているという。

その後は、アイリーンが町を案内してくれた。まず行ったのは、東アフリカ共同体(ルワンダ、ケニア、タンザニア、ウガンダ、ブルンジの5カ国から成る共同体)主催のフェスティバル。その日はタンザニアデーだったらしく、スタジアムの中でタンザニアから来たダンサーたちが伝統ダンスを披露していた。次に登場したタンザニア人有名歌手が歌い始めると、会場スタッフの子どもらしき小さな男の子がステージの前に出てきて歌に合わせて踊り始めた！それに気付いた観客は皆大興奮し、拍手喝采。身を乗り出したり写真を撮ったり、しまいにはチップをあげたりと、大いに盛り上がった。ルワンダに来て早くもアフリカンのノリを目の当たりにし、私も興奮してしまった。



アイリーンのご両親(両端)。店の前で。

次に、地元の人がよく行くという市場に連れて行ってもらった。商品の多くが中国製と思われるものであった。じろじろ見られ、声を掛けられるので少し怖い思いをした。(過ごすうちに慣れたが。)

家に帰った後は、お母さんの夕食作りを手伝うことに。普段はハウスボーイというお手伝いさんのような人が料理をするのだが、今日は出かけていないそうだ。キッチンの外にあり、

炭火を使う。外は暗いので携帯電話の光で料理をしていた。手伝おうと試みたものの、包丁の切れ味が悪く、私はさつまいもの皮むきにも一苦勞だった。アイリーンやお母さんはすいすいと野菜を切ったり茹でたり、てきぱきと料理していた。手を休めて座っていると、青年が英語で声をかけてきた。アイリーンの家族から隣の家を借りて住んでいる大学生らしい。日本から来たと言うと、「日本に行きたい。君たちもルワンダに来てアイリーンから何かを学んだら？同じように自分も日本人に会って多くのことを学びたいんだ」と話してくれた。

そしていよいよ夕食の時間。結局ほとんど役に立てずあきらめて居間に置いてあるテレビを見ていたものの、フランス語なので内容がさっぱり分からず退屈しかけていた私たちのもとに、待ちに待った料理が運ばれてきた！メニューは、サツマイモ、豆、スパゲティ。ルワンダの定番メニューであるが、質素な味でおいしくいただいた。そして、ここで登場したのが「ウガリ」。キャッサバを茹でて練って作られた、見た目は特大蒸しパンのようなもちりとした食べ物。食べやすそうと思ってちぎって口に近づけた瞬間、何とも表現しがたい香りを放つ食べ物であることが判明した。一口食べるのが精一杯であった。アイリーンの大好物らしいが、個人的にはルワンダで苦手な食べ物となってしまった…。

食後にご両親と少しお話をした。2人とも英語をほとんど話さないのので深い話ではできなかったが、ルワンダの歌を教えてもらったり、お互いの言語を教えあったりした。2人とも笑顔を絶やさず、私たちを優しく気遣ってくれて心が温まった。次の朝は早いので、その後すぐに寝る準備をする。トイレは水洗だったが、水が流れないのでバケツに溜めてある水をくんでかける必要があった。シャワーは水のみ。寝室は、アイリーンの部屋を松本と2人で使わせてもらった。蚊帳付きのベッドに横になると、満腹と疲労ですぐ眠りに落ちた。

翌朝、5時半ごろ起床し、トイレの鍵と格闘しているとお母さんが起きてきて助けてくれた。そのうち全員起き出してきたが、朝ごはんは食べないらしいので私たちも食べずに荷物をまとめる。そのうち弟と妹が小学校に行く時間（6時半くらいだったと記憶している）になったので、急いで一緒に写真をパチリ。2人とも普段は笑わなかったがこの瞬間だけ笑ってくれて嬉しかった。この日は朝から JICA プロジェクト見学だったので、荷物をまとめてアイリーンと一緒に家を出る。少し湿っていてひんやりした空気が気持ち良い。既に店にいたお母さんとお父さんにお別れをして、タクシーに乗り込んだ。本当に優しいご両親で、心地よいホームステイだった。

Murakoze cyane（ありがとう）！

いつかまた会いましょう！

アイリーンの弟と妹→



## ■シンシアのボーイフレンド家（小坂弘奈）2月26日

今回の渡航で最後のホームステイで、私は Cynthia（シンシア）の家に泊めてもらうことになった。彼女とは前回の日本招致からの付き合いだ。彼女はいつもおしゃれな格好をしているため、私たち日本メンバーは「きっと Cynthia はお金持ちの娘で、豪邸に住んでいるに違いない！」と勝手な妄想を膨らませていた。そういうこともあり、私は彼女の家に泊まることになり、心を躍らせた。

当日タクシーから降り、家へ向かっていると彼女が「これから私の彼氏の家に行くわよ、あなたにとっても会いたがっているの。」と言うので、ひとまず彼女のボーイフレンドの家へお邪魔することになった。彼の家へ着くと、妹と二人で私を歓迎してくれた。ボーイフレンドは背も高く、優しい好青年だ。ふたりは大学で出会ったらしい。彼は大学を去年卒業し、今は自分の会社を立ち上げるために準備をしているらしい。リビングはきれいに掃除されており、家具からもセンスの良さを感じた。夕飯は彼と、妹がふたりで作ってくれたスパゲティとフライドポテトを食べ、その後ルワンダビールを飲みながら彼の写真を見せてもらった。話を聞くと、彼はこの数年間で両親を病気と事故で亡くしていたようだ。彼の家族の思い出話を聞いているうちに彼のお兄さんが帰宅した。どうやらこの家には彼と、兄、妹が暮らしているらしい。他にもお姉さんがいるのだが、結婚して別の場所で暮らしているのだそう。お兄さんも交えて談話していると、23時を過ぎていたこともあり、私を強烈な睡魔が襲った。内心「そろそろ Cynthia の家に行って眠りたいなあ。」と考えていると Cynthia がそろそろ寝る支度をしようというので私は帰る準備をしようとした。すると彼女が「どこへ行くの？今日はここに泊まるのよ。」と言うので私は驚いた。翌日の目的地へ近いこともあり、Cynthia のボーイフレンドのお宅へ泊まることになっていた。私の Cynthia の豪邸を拝見するという夢は破れたが、彼やその兄妹たちが親切にしてくれたので私は満足だった。

翌朝目が覚めると Cynthia のボーイフレンドが朝ごはんにはサンドウィッチを作ってくれていた。「あ〜、この人はきっといい旦那さんになるのだろうな。」と思いながらルワンダティーと共にいただいた。その日のキガリ観光に彼も同行し、女子たちの長い長い買い物に付き合ってくれた上に、重い荷物を持ってくれた。彼はまさにベストボーイフレンドであった。私を温かく迎えてくれた彼らに感謝である。またいつかルワンダを訪れた時に再会したいと思う人達であった。Cynthia、幸せになってね！



## コラム 定員オーバー

それは、ムランビジェノサイドメモリアル見学を終え、小型バスでブタレに帰る途中の出来事であった。私たち JRYC メンバーはバスで流れる大音量の音楽にのって体を揺らしていた。すると、バスに乗っていたバスボーイが途中でバスを止め、小学校帰り子どもたち数人をどういいうわけか乗せてしまった。すでにぎゅうぎゅうだったバスは、子どもたちの登場でさらにぎゅうぎゅうになり、バスボーイが代わりに降りなければいけないほどだった。私は特に気にせず、右隣に座ってきたかわいい瞳でこちらをじーと見つめる女の子に癒されていたのだが、それも束の間。突然、道路に立っていた警官に呼び止められ、車を止めさせられてしまった。警官と運転手との話がなかなか終わらないので、だんだん不安になってきた。何か悪いことしたっけ…もしや乗車人数？と思い左隣に座っていたルワンダメンバー（ちなみに私が付けたあだ名は「ナカタ」。本名は難しくて覚えられなかった）に状況を尋ねると、案の定、乗りすぎでつかまったらしい。定員 18 人のこのバスに 25 人も乗っているという！「もしや罰金を払うとか…？」とナカタに聞くと、「25000 ルワンダフラン」ときっぱり。25000 ルワンダフランといえば、ホテルに 5 日間泊まれる額で、かなりの大金である。どうなるのだろうか…私も払わされたらどうしよう…せっかく節約してきたお金が…。とっていると、警官が離れ、何事もなかったかのようにバスは運転を再開した。え？なんで？罰金は？ ナカタ曰く「子どもがいっぱい乗ってるから許されたんだよ」。

険しい顔で呼び止めておいて、意外とゆるい。さらに、許す理由がかわいい。This is Rwanda を象徴する出来事であった。

(谷川)



罰金を免れた我々と子どもたち

## ■ナディー家（松本万里子）2月26日



ルワンダ国立大学に今年入学したばかりの Nadine（ナディー）。もちろん、JRYC の活動に参加するのも今回が初めて。そんな状況の中、彼女はホームステイを快く引き受けてくれた。

彼女の家にホームステイすることが決まったとき、正直言えば、私は不安でいっぱいだった。ルワンダに到着して 2 日目のホームステイの際は、谷川と 2 人で Irene 家にホームステイしたのだが、谷川も一緒であったし Irene がどんな人であるのかがある程度分かっていたので、比較的安心してホームステイに臨んだものだった。しかし、今回は違う。1 人でホームステイ…。Nadine がどんな人なのか、いまひとつよく分からない…。何て話しかけたらいいのだろうか…。私の名前は覚えてくれているだろうか…。こんなことばかり頭をよぎった。Nadine は、他の企画に参加していたものの、私は彼女と会話らしい会話をしたことは、この日が来るまで、無かった。私は割と大人しい性格なのだが、彼女もまた大人しい性格であった。

しかし、この不安は、彼女の家族に会った途端に消えてしまった。

Nadine 家は、父・母・兄・姉 2 人・Nadine・妹というメンバーである。1 番上の姉は結婚し、別のところに住んでおり、妹は学校の寮で生活している。Nadine 自身も、大学の寮で生活しているため、この家には普段、父・母・兄・2 番目の姉（筆者と同年！）が住んでいる。また、兄と 2 番目の姉は、仕事をしながら学校で勉強している。

家に着くと、母と姉が笑顔で迎えてくれた。その数十分後には、兄が帰ってきた。兄が帰宅後、簡単に自己紹介を済ませると、皆で夕食を食べた。メニューは、パスタ・チップス・ホウレン草を炒めたもの・牛肉・ライス・茹でたイモであった。食事中会話の中で、私がルワンダに着いてから、まだルワンダ産牛乳を飲んだことがないという事実がばれてしまった。飲んだら腹痛を招くのではないかとことを恐れていた私は、あえて飲まないようにしていたのだが、家族全員から絶対飲むべきだと言われ目の前に差し出されると、さすがに断ることが出来ず、ついにルワンダ産牛乳を飲んだ。味は、日本と大差ないが、若干薄い気がした。（しばらく経ってから、軽い腹痛に襲われた。）夕食後、家族との会話と牛乳を楽しみつつ、父の帰宅を待った。家族は日本について興味を示してくれ、日本語とキニャルワンダ語を互いに教えあった。Nadine は、日本語の発音に苦戦していたが、私にとってはキニャルワンダ語の発音の方がよっぽど難しかった。私が、アガセチェ（ルワンダの伝統的なバスケット）をお土産で買って帰りたいと言うと、母が「私はアガセチェの作り方知ってるの！」と言った。「もっとこの家にステイしてくれたら、作り方教えてあげられるのに。」とも言ってくれ、とても嬉しかった。結局、私は眠気に打ち勝



つことが出来ず、父の帰宅を待たずして、寝てしまった。部屋には大きなアガセチェが置いてあった。

翌朝、7:00 ころ Nadine が父に紹介すると、私を呼びに来た。父はとても大柄であったが、とても優しい人であった。貿易関係の仕事に従事しており、朝早くから夜遅くまで働いている。母も、この仕事を手伝っている。7:30 には、父・母・兄はそれぞれ仕事



事に行ってしまった。家に残った Nadine と姉と私は朝食を食べた。牛乳たっぷりのルワンダコーヒーとアボカドを塗ったパンを食べながら、満ち足りた気分になっていた。

それから、家の付近を散歩した。Nadine 家は自分が住む家とは別に、何軒か家を所有しており、その家を他人に貸している。また台所が外にあり、かまどのような設備で、毎日料理をしている。近所の人との会話も楽しかった。そんなことをしているうちに、あっという間に家を去る時間になった。

たった一日のホームステイだったが、とても楽しい時間を過ごすことができた。Nadine と仲良くなることもできた。去り際に、姉が肩掛けバッグを私にくれた。たった 1 日しか一緒にいられなかったのに、申し訳ないという気がしたが、私が受け取ると、彼女はすごく喜んでくれた。父や母も、もっと泊まっていけばいいのにと伝えてくれ、私はとても嬉しかった。またこの家族に会いに、ルワンダへ来たいと思った。限られた時間ではあったが、Nadine の家にホームステイできて良かったと、心から思う。最高の笑顔で私を受け入れてくれた Nadine 家に感謝。ありがとうございました。



↑ 姉からもらったバッグを早速使い、買い物をする筆者。

## ■カリオペ家（白川千尋・谷川琴乃）2月26日

筆者：白川

人生初のホームステイがルワンダで、まさか2度目もルワンダでできるとは！さらに今回のホームステイ先は日本ルワンダ学生会議創設メンバーでもあったカリオペ先輩の家！！カリオペは現在医者をしており、奥さんのエメと息子のソング、あとお手伝いさんの方たちが3人と暮らしていた。

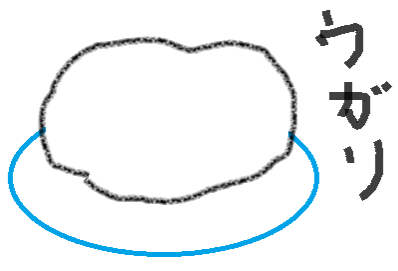
カリオペに初めて会ったのは、実はユジーン家にホームステイした日であり、家が近いということでこの日来てくれた。待ち合わせ場所でカリオペらしき人を見つけたので「カリオペですか！？」と聞いたら「違うよ！カリオペの弟さ！」というので、それを信じ切ってしまった白川は、「えー！！でも会えて嬉しいです！」とカリオペ本人を弟であると勘違いしたままハグ。そこで「私がかリオペさ！」と言われ「えー！！」。大変気さくで面白い人であることがここで分かったのである。

そしてまたしてもカリオペジョークが炸裂する。メンバーの松本が「あなたがカリオペですか！？」と聞くと、カリオペは「私はカリオペではないよ！！」といわれ松本は「えー？！」という状態になっていた。なんとも日本人は突然のジョークに弱いことかとしみじみ思った筆者であった・・・。

カリオペ家では最初、日本人メンバーとブタレからキガリまで同行してくれたルワンダンメンバー、そしてルワンダに渡航したら必ずお世話になるタクシードライバーのムニャカジらと団欒タイム。その後、数人のルワンダンメンバーと谷川、白川が残り夕食の時間。アイリッシュポテト（こふきいものようないも）とバナナ（甘くない）そしてまさかの魚…！ルワンダは海に面しておらず魚は湖で捕れるのだが、魚は高級食品として扱われているのだ。恐るべきカリオペ！「今日は特別な日だからいいのさ！」と言ってくれた。ごちそうさまでした・・・！

息子のソングは本当に生まれて8か月ですか？というくらい大きかった（笑）。そしてすごくソフトなお肌……。そう、それはまるでウガリのようなでした。ウガリとはキャッサバを練ったもちみたいなルワンダンフードで呑み込めるほどの大きさに切って噛まずにそのまま食道管へ流すのだ。なぜ噛まないかの理由は食べるとわかるのだが、けっこう臭く、噛むと臭さが口の中で充満するためというのは本当かどうかわからないが、噛まないほうがよい食べ物である。

奥さんのエメはさっぱりしていてフレンドリーな方だった。朝食はエメの淹れてくれたお茶とパン、バナナ（甘い）でお茶はユジーン家で飲んだお茶とは違い、チャイとティーを混ぜたような味がして、これまた大変おいしかった。筆者が帰国して、エメとチャットをしていたときに気付いたことなのだが、なんとエメと筆者の誕生日が同じであったのである。このことをカリオペに伝えたら、「hahaha! 一緒に祝ってあげるよ！」と言ってくれた。筆者は今年の誕生日をけっこう楽しみしている・・・。



## コラム THE accident happened in カリオペ家

このコラムは、カリオペ家（カリオペについては筆者のホームステイ体験記を参照されたし）にて、団欒タイムそして夕食が終わり、カリオペからシャワールーム（ルワンダはユニットバス）の案内を受け筆者がトイレを利用中の時に起きた出来事を書いたものである。

「お湯が使えるから、使っていいよー」とカリオペから言われたとき、「ルワンダでお湯がでるシャワーが使えるなんて！」と筆者は感動した。ルワンダでは基本、蛇口からは冷たい水しかでない。渡航中、9<sup>th</sup>メンバーはポットでお湯を3回くらい沸かし、そのお湯をたらいにためて体を洗っていたので、シャワーからお湯がでるといふ文明の賜物に感銘を受けた。ルンルンでシャワーに入る準備をして、トイレを利用している最中に……

ふっ…… 「あ……停電……」

まさかの停電である。停電はルワンダではよく起こることなのでしかたがない。

しかし、しかたがなくはないことはトイレの利用中であつたということである。

筆者は20秒ほど、この後とるべき行動について考えた。まず、筆者は背中方面にあるトイレレットペーパーを慎重に床に落とさないように探りあてた。（※図参照）

次のステージは見えないなかでどうやって流すか。ルワンダでは水洗トイレが普通だが、水洗といってもレバーを押せば流れるタイプばかりではなく、桶で水をくんで流すタイプを導入しているところもある。カリオペ家は後者のタイプであつた。

何も見えない……

これは助けを求めろしかない。助けを求めに筆者がその場を後にしようとした時、

暗闇の中から一筋の光が見えた……

カリオペの奥さんであるエメが筆者を心配して、ライトを手を持って来てくれたのである。

エメのおかげで筆者は流すことができたのである。

しばらく、お湯がでるシャワーも利用することができなかつた……

トイレを利用している最中に停電という大変良い経験をする  
ことができた。

THIS IS RWANDA

（白川）



※図：背中方面にあるトイレレットペーパー

# 第四章

---

## 参加者感想

小坂 弘奈	フェリス女学院大学国際交流学部 2 年	86
白川 千尋	専修大学法学部 2 年	88
谷川 琴乃	早稲田大学政治経済学部 2 年	91
松本 万里子	立命館大学経済学部 2 年	94



### ルワンダとの出会い

“ルワンダ”という国を知ったのは高校入学前の春であった。つまり、今から 5 年前の桜の季節。私は偶然あるテレビ番組で映画『ルワンダの涙』を宣伝しているのを見かけ、なんとなく気になったのでレンタルビデオショップへ行き、ひとりでそれを鑑賞した。隣人からナタなどの農具で殺され、街は遺体であふれかえるといった衝撃的な映像を観た後、私はしばらく涙が止まらなかった。戦争。歴史の授業や卒業旅行で訪ずれた広島原爆ドーム、テレビや映画などを通じて日頃からイメージはしていたが、どこか遠い国の出来事と考えてしまっていた。だが、この映画はぐっと私の胸に突き刺さってきた。理由がわからないが、それがきっかけで私はルワンダを追いかけはじめた。高校生になった私はフィールドワークを通じて日本や、世界の問題に目を向けていくといった部活動に参加していた私は、部活の仲間と文化祭でルワンダカフェというのを開催し、ルワンダについてのパネル展示やルワンダコーヒーの販売をした。(実は、そこへゲストスピーカーとしてルワンダ紹介をしてもらったのが日本ルワンダ学生会議の先輩たちである。) さらに私の高校では大学の卒論のような論文を 2 年間かけて書き上げるという授業があった。そこで私は「ルワンダの復興と観光」というテーマに決めた。論文を書くためにルワンダについて調べてみると、大虐殺後のルワンダの目まぐるしい復興と観光に力をいれているということを知った。大虐殺が過去の出来事となりつつあることを知り、私はよりルワンダに興味を持つようになり、いつしか「ルワンダ好きな変な高校生」になっていた。大学生になった私は一瞬も迷わず日本ルワンダ学生会議のメンバーになり、今に至る。私は高校、大学とまさにルワンダ漬けの日々を送ってきた。長くなってしまったが、ここまでが私とルワンダの出会いだ。

## ルワンダで考えたこと

2013年2月13日、ついに私はルワンダの地に降り立つ日が来た。私のルワンダ好きを知っている高校時代の友人は「よかったね！やっとな夢が叶うね！」と言い、またある人は「アフリカなんて危険なところに行って大丈夫なの？」と言った。そんな周囲の声をよそに私はただワクワクしていた。長い長いフライトも、大好きなルワンダへ行けるという期待感で全く苦に感じなかった。そして、ルワンダに到着。憧れの国を訪れ、前年の招致企画で出会ったルワンダの友達と再会し、私はそれだけで満足してしまいそうなくらいだった。ルワンダでの16日間、ジェノサイドメモリアル訪問や、女性の経済的自立を応援するアイスクリーム屋さんで働く女性へのインタビュー、ルワンダで平和を学ぶ学生との交流など様々な企画それぞれに発見や驚きがあり、考えることがたくさんあった。しかし、それをいざ言葉にしようとするとなかなか難しい。どんなに考えても、ありきたりな言葉しか思い浮かばない。このままでは報告書が書けない…としばらく悩んだ結果、「ありきたりな感想しか書けないのは当然だ。」という答えに至った。誰しもはじめて出会うモノ（国、人、食べ物など）に対して抱く感情は驚きが大半を占めていて、その時点ではそれが好きかそうではないかというくらいではないかと思う。私は今回のルワンダ渡航での出会いのほぼすべてがはじめての経験となったため、始終驚いていた。

ルワンダをもっと知り、同時に彼らに私という人間や、日本人、日本を知ってもらいたいという気持ちでルワンダでの日々を過ごしていたのだが、時に互いを理解できなくて、言い争いになってしまう日もあった。理解し合えなかったことがショックで落ち込んでいた私を、あるルワンダメンバーに「大丈夫、君の気持ちは理解できるよ。落ち込まないで。」と励まされた。あなたを理解しているよ、という言葉だけで心底安心できることに気付いた。そして、ケンカをするということは、本気で相手を（または相手が私を）理解しようとしている証拠ではないかと考える。相手と良い関係を築こうとする時、相手を理解したいし、自分のことも理解してもらいたい。自然にそう思うではないか。その思考そのものが、私たち日本ルワンダ学生会議が活動理念としている《相互理解》なのではないか。しかし、今回の旅はゴールではない。私はつまるところ相互理解にゴールはないと考える。1度目の出会いでありきたりな言葉しか思い浮かばなくても、2度目、3度目ではまた違うことを考えるだろう。ゴールのない道をルワンダと日本の学生が日々奮闘しながら進んでいく、日本ルワンダ学生会議の活動が私は好きである。

どんな国も、人も、当然良い面と悪い面を持ち合わせている。その両面を私たちに見せてくれたルワンダメンバーには本当に感謝している。そして渡航にあたり私を支えてくれた家族や日本ルワンダ学生会議メンバー、顧問の小峯先生をはじめ多くの方々に、この場を借りて御礼申し上げたい。本当にありがとうございました。最後に私が信じている言葉で締めくくるとしたら、「情熱の傾く方へすすむ。会いたい人にはまた会える」ということだ。彼らとの再会を楽しみに、私はこれからも憧れの国ルワンダを追いかけ続けていくのだろう。

ルワンダに行くこともさることながら、アフリカに行くこと自体が私の夢であった。たくさんの自然に囲まれ、ゆっくり時間が流れる世界、アフリカ。わたしにとってアフリカは憧れであった。

ルワンダに興味を持ったのは、高校三年生の時に観た『ルワンダの涙』がきっかけだった。道にたくさん転がっている死体。レイプされた後に殺された女性の無残な姿。神にすがるといって教会へ逃げて殺された人々。生後間もなく殺された赤ちゃん。その時わたしは二歳であった。もちろんジェノサイドがあったことなんて知らない。生まれた場所が違うだけで人生が全然違うということに奇妙さと不思議な感じとなんとも言えない気持ちの悪さが心に残った。



わたしが見たルワンダの第一印象はジェノサイドが過去にあったのかと疑うくらい日々成長する国の姿であった。車は多く、その分排気ガスの量も多い。携帯電話を片手にせわしなく話す人々。一方で、物乞いもいた。中には腕の無い人や脚の無い人もいて、それを見せてお金を乞うていた。ジェノサイドを乗り越えて「ルワンダ人」として生きている人々の姿とはこれかと景色を眺めるようにして見ていた。

長いようで短かった 16 日間について書きたいことはたくさんあるが、「ジェノサイド」と「相互理解」の二つに絞って書くことにする。

### ジェノサイド

わたしはジェノサイドメモリアル訪問とジェノサイドインタビューの企画をもっていた。この企画はわたしの「なぜジェノサイドは起きてしまったのか」という疑問を考えるための素材となった。なぜ、わたしがそこまでジェノサイドに固執するかというと、ジェノサイドがあったから今のルワンダがあると考えているからである。ジェノサイドのおかげとまでは言わないが、現在のルワンダを見るならば、ジェノサイドは避けては通れない。私にとって現在のルワンダを見るのにジェノサイドも見なければいけないと考えることは、決して過去ばかりに目を向けて、今のルワンダを見ようとしなないということではない。ジェノサイドはただ過去に起こった出来事ではなく、現在のルワンダにも直結しているリアルな出来事だからだ。

インタビュー以外にもジェノサイドの話をルワンダンとしたのだが、ジェノサイドの当事者であったにも関わらず、ジェノサイドを淡々と語り、ジェノサイドに対して冷静に受け止めている人が多かった気がする。むしろ、ムランビのメモリアルに行くと、ミイラ化した遺体を目の当たりにして泣いてしまったわたしの方が冷静なんかではなかった。ジェノサイドがあったことは事実として分かっているけれど、ジェノサイドが起こったことを



未だに信じられていない自分がいた。そんな自分と、ルワンダの間には温度差があったように感じられた。

ルワンダへ行ったら「なぜジェノサイドは起きたのか」というわたしの疑問に答えてくれる新しい発見があるのではないかと期待をしていた。しかし、ジェノサイドミュージアムに行ったからといって、ジェノサイドのことをルワンダ人に聞いたからといって、自分の満足するような答えが得られたというわけではなかった。書かれていたこと、言っていたことは日本で読んだ文献にも書いてあることとほとんど同じだったので、新しい発見というものはなかった。強いて言うならば、知れたことはジェノサイドの根本的な原因を知っているルワンダ人はほとんどいないのかもしれないということと、ルワンダ政府はそれを隠しているのかもしれないということであった。

ジェノサイドに対する興味と関心は尽きない。ルワンダへ行ってからもっと知りたくなった。ルワンダだけを見ていては分からないこともたくさんある。より多くの視点から見つめなければ、答えは見つからない。しかし実は明確な答えなどないかもしれない。それでもいいからわたしが納得できる答えを探し続けたいと思った。

## 相互理解

この団体の理念である“相互理解”にわたしは苦手意識を持っていたかもしれない。この団体に入ったときは大して相互理解のことなど考えていなかった。前回招致の時さえ、相互理解はわたしの中で重要な地位にはなかった。しかしだからといって相互理解とは何かと考えたとき、「自分の答えはないといけないなあ」と思い、学生会議でディスカッションをすることがわたしにとっての相互理解としていた。

相互理解はあくまで理念であって目的ではない。これはずっと言われ続け、また思ってきたことでもあったが、どうしても無意識に相互理解を目的にしてしまう自分がいた。たださえものすごく抽象的で難しい概念なのに、それを目的にするとなるとさらに難しくなる。結局は間に合わせの答えを自分の相互理解にしてしまった。この時のわたしは相互理解を十分に考えようとする気持ちすらなかった。そんな姿勢でこの団体にいた結果、なぜこの団体にいるのかが分からなくなってしまった。「ジェノサイドのことが知りたいなら自分で本を読んで知ればいいじゃないか」「この団体に居続ける理由なんてないんじゃないか」とまで思った。渡航するまで、この団体で活動するモチベーションはどんどん下がっていった。

渡航してすぐ相互理解とは何かと考え始めたわけではないが、今回の渡航で初めて相互理解と真正面から向き合ったと思う。この渡航期間中、日本人の態度の悪さについてメンバー間で少しもめたことがあった。「相互理解を掲げているのに、日本人がそんな態度でいて、一体何をしに来たのか」と言っている自分がいた。渡航の最後の方でルワンダ側リーダーと団体の運営について喧嘩をしたのだが、「こんなやつと相互理解なんてできるわけがない」と思った自分がいた。振り返ってみると、相互理解を考える時間が多くなっていた。

ルワンダ側リーダーと喧嘩をしたことを機に相互理解とは何かが分からなくなってしまった。なぜ話を聞いてくれないのか、なぜ分かろうとしてくれないのかと絶望した一方で、相手を分かろうとしていない自分もいたのではないかと。自分の主張が正しいと思い、相手に自分の言い分を理解させようとする。これは相互理解といえるのか？「こうやって喧嘩することも相互理解である」と彼は言ったが、これがお互いを理解し合うことなのか？いったい相互理解とは何のことなのだろうか。今のわたしには相互理解を言語化することはあまりに難しく、相互理解とはこれだなんて答えることができない。ルワンダに行って、ルワンダ人に囲まれて暮らし、一緒に活動をした結果、相互理解が何か分からなくなってしまった。

相互理解とは何か。おそらく答えは見つからないし、きっと見つけようと思って見つけるものではないのかもしれない。相互理解を言語化できなくてもいいのかもしれない。相互理解とは「なんとなくこんなもんだろ」というのが感じられればいいのではないかと。「この人たちともっと一緒にいたい」「またここに帰ってきて彼らに会いたい」と強く心の底から思うことができた。この気持ちが相互理解のことを指しているのかは分からない。もしかしたら相互理解の一つなのかもしれないが、簡単に「これが相互理解です」なんて言いたくはない。

ルワンダでは何より“考える時間”というものが多かった。日本にいるときはあっという間に時間が過ぎてしまい、考える時間はほとんどなかったし、考えるための時間を作ろうともしていなかった。ルワンダでは、ゆっくり物事を考える時間を持つことができた。考えすぎた結果、相互理解のように分からなくなってしまったものもあったが、それは良い悪いということではない。とにかくこの渡航では、相互理解と真正面から向き合い、相互理解を考え続け、相互理解で悩むことができた。

第9回本会議は規約の壁にぶちあたったことから始まる。この渡航には渡航経験者がいなかった。渡航には親の承諾が必須だが、当然これを聞いた親は快諾しなかった。アフリカに行きたいと言うと、開口一番「え！危ないじゃない！」と言われた。しかしこんな娘を育ててきてくれた親は娘がどんな奴であるのか分かっている。「どうせ止めたって行くんでしょ」とルワンダ渡航を認めてくれた。まずは親に感謝したい。

そして WAVOC、小峯先生、JRYC メンバーといった、たくさんの方々がこの渡航を後押ししてくれた。この後押しがなければルワンダ渡航は始まらなかった。初めてアフリカに来るということで、ボディガードマンのように私たちと共に行動してくれたルワンダメンバー。そして渡航中、共に助け合い、時にはもめ、笑いあい、恥ずかしい思い出すらも共に作った9回渡航メンバー。このメンバーで行けて本当に良かった。感謝の気持ちでいっぱいである。ありがとうございました。

### ■ルワンダの人々

渡航前、私は不安でたまらなかった。もちろんルワンダにはずっと行きたいと思っていたし、楽しい気持ちもあったが、不安のほうが明らかに勝っていた。慣れない生活、言語、安全対策、健康管理・・・想像はいつも悪い方向に行き、私は完全に萎縮してしまっていた。



しかし今、自信を持って言えるのは、ルワンダに行き、本当によかったということだ。もちろん全部良いことばかりだったわけではないし、後悔、反省、不満を挙げればきりがない。でも、困ったとき、いやなことがあったとき、必ず誰かが助けてくれた。話を聞いて、共感して、力になろうとしてくれた。食事屋で言葉がわからなくて困っていたとき、お客さんの一人が助けてくれた。メンバーの一人ともめてしまったときも、他のメンバーが話を聞いて、アドバイスしてくれた。私の不安や偏見を解消したのは、ルワンダで出会った人々である。とびっきりの笑顔で歓迎してくれたルワンダメンバー。ホームステイ先の優しいお父さんとお母さん。キニヤルワンダ語で挨拶すると、すてきな笑顔を返してくれた店員さん。小さな一つひとつの優しさや温かさが、不安と偏見にまみれた私の心を少しずつほぐしていった。

### ■ジェノサイド

そんなルワンダ人の優しさに触れるたび、この国でジェノサイドが起こったことがますます信じられなくなる。ジェノサイドから19年経ったルワンダで、日常生活の中にジェノサイドがあったことを思い起こさせるものはほとんど見当たらない。杖をついている人を時々見かけたり、水田でピンクの囚人服を着た人たちが作業しているのを見かけたりした程度だ。そしてルワンダ人は口を揃えて「今私たちは一つだ」と言う。

ルワンダメンバーと共にジェノサイドメモリアルに行っても、実感はわかかなかった。19年前、彼らのような人たちが誰かを殺し、あるいは殺されていたのだと頭ではわかっているけど想像できなかった。淡々と展示の説明をしている彼らを見て、どこかの遠い国で起きたことのようにさえ感じられた。写真や映像、骸骨やミイラ化した遺体を見ても、私は他のメンバーのように涙は出なかった。

本当に起こったのだ、と初めて目が覚めるような思いをしたのは、メンバーの一人が自分の体験を語ってくれたときだった。私にとっては、ジェノサイドを経験し、直接その目で見た人の口から語られる体験の方が、何倍もリアリティをもって感情にうったえかけてきた。そのとき初めて、今まで見た写真や映像やミイラが、現実と結びついた。彼だけでなく、今まで会ったほとんどの人が、人が人を殺し合う姿や、道端に転がる死体をその目で見て、殺される人の悲痛な叫び声を聞いていたんだ、ということが初めて生々しく意識され、事実の重みがのしかかってきた。

それと同時に、経験していない私に彼らの気持ちは理解できるはずはない、と、彼らがとても遠い存在に思えた。彼は、普段は明るいし、メモリアルからの帰り道もいつものように陽気に歌っていた。悲しそうにも、無理しているようにも見えなかった。なぜそういうふうにすぐに切り替えられるのか、時間が経てば乗り越えられものなのか、それを経験していない私にはわからない。

唯一確かに感じたのは、彼らはもうこの悲劇を繰り返さないだろう、ということだ。虐殺が起きたのは 1994 年が初めてではなかった。民族として分けられて以来、1994 年以前も殺し合いは何度も繰り返されてきた。でも彼らのジェノサイドについて語る様子を見ていると、彼らはそれを断ち切ることができると感じた。そんなに記憶がない若い世代だからかもしれないが、彼らは自分の国に確かに起こってしまった歴史として、隠そうとするでも、感情的になるでもなく、ジェノサイドが起きたという事実に向き合い、受け入れ、私たちよりも客観的に見つめているように感じた。そして同時に彼らは未来を見つめていた。

#### ■ 発展と貧困

ルワンダは現在急速な発展を遂げており、街を歩くとそれはひしひしと伝わってくる。しかし、負の側面からも目をそらすべきではない。特に都市部で見たものは衝撃的だった。ひじから先がない腕を差し出してお金をねだる子どもたち。道端にしゃがんで物を売っている人のこちらを見る鋭い視線。知的障がい者の女性に話しかけられた私に向かって、「そいつは foolish (ばか) だ、ほっておけ」と言った男性の顔に浮かんでいた、軽蔑したような薄ら笑い。一番記憶に残っているのは、キガリのバス停での出来事だ。バスの中で発車を待っていたとき、外から窓をバンバンと叩かれたので見ると、顔に大きな傷のある人が無表情で手を差し出していた。断っても、次から次へと窓を叩く人は絶えない。腕がない人、脚がない人、顔が溶けたような人、目に包帯を巻いている人……。怖くて、何もしない自分を認めたくなくて、見るのを避けてきたものを見ていることに耐えられなくて、早く解放されたいと、それだけしか考えられなかった。

現地の人にとってはこの状況が当たり前のだろうし、私もルワンダに貧困や格差が存在していることくらい理解していた。しかし直接この目で見て、否定できない事実を突きつけられると、さすがに気持ちが沈んだ。ルワンダメンバーは、よく「貧しい人たち」のためにも発展したい、貧困をなくしたい、と言う。でも彼らと私が見た「貧しい人たち」は同じ国に生きていても違う世界に生きているように感じた。発展の象徴・キガリタワーを「ルワンダのスカイツリーだよ」と言って誇らしげに指差す彼らの目に、あの人たちの姿はどう映っていたのだろうか。

#### ■ 「相互理解」

今回の渡航で、「相互理解」とは何なのかわからなくなってしまった。決定的にわからなくなったのは、ルワンダメンバーの一人と、団体のあり方について意見がぶつかってしまったときだ。こちらの意見を聞こうとさえしなかった彼は、最後に「これも相互理解だ」と言った。しかしそれは「相互」と言うにはあまりに一方的過ぎた。相手が話を聞いてくれないのが悔しく、自分の意見をうまく説明できない自分が情けなかった。「相互理解」とは何なのかわからないままだったが、そのとき私が彼と「相互理解」をしようするのをあきらめたことは確かだった。

でもだからといって、それが失敗だとは思っていない。むしろたった 16 日間でお互いに理解

し合える方が不思議だ。「相互理解」とは何なのか、考え、悩み、自分に問いかける機会を持つただけでも収穫だった。お互いの文化や生活の違いを知ったとしても、価値観がぶつかったとき、どこまで妥協するかはまた別問題だ。「尊重」というと聞こえはいいが、きれいごとでは真の関係は築けない。時には妥協したり、反論したり、言いたくないことを言ったりしなければならぬのだ。そういう過程があってはじめて「相互理解」が成り立つのかな、と思ったりした。

今回多くのルワンダメンバーと交流する中で、今私の考えていることを理解してくれた、と感じる瞬間もあったし、相手の言わんとしていることが手に取るようにわかる瞬間もあった。そのとき相手を「ルワンダ人」としてではなく、一人の「人間」として見ていると感じて、私はそれがうれしかった。「相互理解」のことを考えて接すると難しく考えてしまうけれど、こういう純粋な気持ちも大事にしていきたいと思う。

このようにいろんな面を併せ持っているルワンダへの興味は尽きないどころか、今回の渡航で、今までの何倍もルワンダのことをもっと知りたいという気持ちが強まった。日本で本を読んだり、ニュースを見たりして、どんなにルワンダのことを知ろうとしても決して聞こえてくることのない小さな声に囲まれて過ごしたこの16日間は、本当に貴重な経験だった。ルワンダについて知ることができただけでなく、日本のことも新たな視点から見ることができたし、人とかかわることを通じて、同時に自分自身とも向き合えた日々でもあった。私にとってすべてのことが初めてで、消化しきれないほど多くの情報を浴び、いろんなことを感じ、考えた。帰国してから1ヶ月経った今も、ルワンダでの経験を自分の中で整理しきれていない。消化するのにこれからもずっと長い時間がかかりそうだ。その過程で思い出すたびに何か発見があって、そしてそれらの小さな発見の積み重ねが、人生の中で何か重要なことにつながっていく気がしてならない。

私はルワンダで多くの人に出会い、話をし、笑いあった。私は彼らの純粋さが好きだし、人を思いやる気持ちが好きだし、なんといっても彼らの笑顔が好きだ。(普段から人とかかわるのが苦手な私にとって、こう断言できることはちょっとした事件である。) これからも、愛すべきこの国と、この国の人々とつながっていたいと思う。

最後に、共に活動したたくましい3人の日本メンバーに感謝したい。ほぼ毎夜、集まってその日を振り返り、情報を共有し、みんなの意見を聞くことができたのが、とてもためになる楽しい時間だった。冗談を言い合い、時には深い話もし、そして私の良くない点をはっきり指摘し、偏見まみれの私をもっと広い世界に触れる手助けをしてくれた。

また、授業期間であるにもかかわらず、ほとんどの場所に同行してくれたルワンダメンバーにも感謝したい。彼らなしではこの渡航を終えることができなかった。

そして、日本やルワンダで私たちの活動に協力して下さったすべての方々にも心より感謝申し上げます。



経由地のドーハからルワンダへ向かう飛行機の中、私は終始、窓の外を眺めていた。一面砂漠だった景色が、徐々に変化し、木々が増え、赤土が見え始める——私は、この移り変わる景色から、目をそらすことが出来なかった。

キガリ空港に到着し、宿へ向かうタクシーの中、目に映るものすべてが新鮮で、「ああ、私、ついに来たんだ。アフリカに…。ルワンダに…」と、しみじみ感じた。

私にとって、ルワンダを訪れることは、この団体に所属している中で、また自分の学生生活の中で、一つの大きな目標であった。渡航メンバーに決定したとき、目標が達成できると嬉しく思ったのと同時に、不安にも思った。私は、唯一関西支部からの参加であった。そのため、渡航前には、なかなか他の渡航メンバーに会うことが出来ず、チャットやメールで連絡を取り合っていた。着々と渡航準備が進んでいても、なかなか自分が渡航することを、信じられないでいた。成田空港へ向かう新幹線に乗っていても、まだ信じられないでいた。成田空港に到着し、他のメンバーと合流して初めて、渡航することを実感し、これから始まる本会議に向けて、覚悟が出来た。

ルワンダに到着してからの 16 日間は、私にとって、充実した忘れることの出来ない日々となった。音楽を通じてルワンダメンバーとの一体感を楽しみ、文化の違いや習慣の違いに驚き、団体の掲げる「相互理解」に悩み、自分の話す英語の拙さを恥じ、ルワンダの現実を知った。ときには、自分ではどうにもならない事態に直面し、自分の無力さを感じた。様々な経験をした 16 日間であったが、ここでは、特に印象的だった二点について述べる。

一点目は、首都キガリの様子である。ルワンダに到着した初日、我々はキガリの街中を歩いていた。高層ビルが立ち並び、次々とビルの建設が進んでいた。しかし一方で、力なく歩いたり、座り込んでいたりする大人たちの姿や、お金を求めて寄ってくる子供たちに衝撃を受けた。大使館の方の話によると、普段は、このようなことはないが、私たちが歩いていたその日は、偶然にも「貧しい人々を助けよう」という日であったらしく、このような事態に遭遇したのであろうということであった。偶然に遭遇した出来事であったが、このとき私は、発展や開発が進む街の様子とそこに暮らす人々の姿にギャップを感じ

た。また、キガリを歩いていて、砂埃が舞う中、車が真っ黒い排ガスを出しながら走行していることが、気になった。私には、このことが人々の身体に、どれだけの悪影響を与えているのかということは、はっきり分からない。しかし、毎日このような中で過ごしていたら、体の不調を感じる人もいるであろうことは、容易に察しがついた。学生会議や普段の会話を通し、ルワンダメンバーからは、開発や発展に対する熱意が感じられた。特に、貧しい人を救うために、開発や発展が必要だと考えている人が多かった。しかし、それは果たして本当なのだろうか。私の学生会議の項にもあったように、薬を例に出して説明してくれた人もいたが、その例で言えば、本当に薬によるメリットの方が大きいのであろうか。仮に本当だとしても、薬の処方方を、もっと考えるべきではないのか。私は、キガリの様子でルワンダメンバーの話から、そのようなことを考え、もっと詳しく知りたいと思った。

二点目は、現地での生活である。私は今回の渡航で、初めて水シャワーを経験した。現地の人々がそうしているように、シャワーは朝浴びるものだというのを、身を以て学んだ。ルワンダに着いて初めのうちは、日本と同じ感覚で、夜にシャワーを浴びていた。しかし、だんだん体調に変化が現れ、咳や鼻水といった風邪っぽい症状が出始めた。そして、その時初めて自分の生活を振り返ってみると、水シャワーということに気が付いた。それ以来、朝に水シャワーをする生活に切り替え、それに伴い体調は回復した。また、主食がイモである経験も初めてであった。一口にイモと言っても、アイリッシュポテトやキャッサバなどいろいろな種類があり、調理法も煮る・焼く・揚げるなど様々であった。レストランでは、ビュッフェ形式で食事が用意されており、どの店でも、ライス・パスタ・豆そしてイモは、定番であった。今になって、ルワンダでの食事を思い返してみると、炭水化物を含む食材を食べることが多く、種類も豊富であったが、他の栄養素を含む食材を食べることが少なかったことに気がつく。JICA 見学の際、専門家の方に聞いた話によれば、育てようと思えば、もっといろいろな種類の野菜が育つ土壌であるが、その野菜を食べる文化がないため、育てないということであった。これを聞いたとき、育つ環境があるのに、育てないのは残念であると思ったと同時に、今後、食文化にも変化をもたらすことが出来れば良いのにと、考えた。

ルワンダでは、ルワンダメンバーとその家族に、とてもお世話になった。ホームステイの際には、近所を案内してくれたり、たくさんの手料理を振る舞ってくれたり、さらにプレゼントまでくれ、申し訳ないくらいであった。また、毎日、ルワンダメンバーが付き添ってくれ、大きなトラブルもなく、無事に全日程を終えることが出来た。

最後に、渡航前にご指導いただいた顧問の小峯先生、多くのアドバイスをいただいた先輩方、空港まで見送りに来てくれた日本人メンバー、ルワンダでお世話になったルワンダメンバー、そして今回一緒に渡航した小坂さん・白川さん・谷川さんに、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

## コラム 仕事しろよ、ルワンディーズ

外を歩いていて常に見かける光景があった。

それは、おそらく仕事をしているのだが見かけるたびに手を休めているルワンディーズである。

特に気になったのが、日本人メンバーが宿泊していたホテル（バルトスホテルロジ in ブタレ）の草刈をしていたルワンディーである。このルワンディーを最初見たとき、彼は裏庭の草刈をしていた。裏庭といってもそんな広いわけではない。（※写真参照）

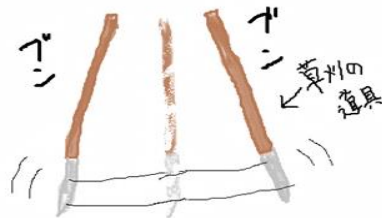


日本人メンバーが洗濯物を干しに裏庭に行くとき彼はよくいたのだが、草を刈るというよりはかき回しているようにしか見えない。洗濯物の乾き具合を確認するために、30分置き程度に裏庭に行くのだが、草刈は明らかに進んでいない……。

また、彼には定位置があり、レンガのでっばりの部分によくよりかかっているのだが、見るたびにそこで休憩らしき行動をとっていたのである。

少しずつ、少しずつ草が刈られていった……。おそらく裏庭の草を刈り終える（刈残し多々あり）のに5日ほどかかったのではないだろうか。

ある日の帰り道、草刈のルワンディーが別の場所の草刈をしていた。やはり彼は刃物を振り回していた（ように見えた）。



しかし仕事をしていないと見えてしまったのは、日本人がせかせか働く姿と比較していたからであり、きっと彼らはルワンダ的にはしっかり仕事をしているということなのだろう。

嗚呼…… THIS IS RWANDA

（白川）



## コラム ムニヤカジ

ルワンダには日本語を話せるタクシードライバーが存在する。彼の名はムニヤカジ。私たちは渡航前から彼の噂を聞いており、安全のためにもキガリ市内での移動は毎回彼にお願いしているのだ。渡航前は「日本語を話せると言っても挨拶程度でしょ」と正直甘く見ていたが、以前日本で働いていたことがあるらしく、彼の日本語スキルは想像以上に素晴らしかった。

そんなある日、JICA 農業研修の見学のため彼の車で現地まで向かうと日本人職員の方が親切に資料を人数分配って下さった。タクシードライバーのムニヤカジも学生と間違えられ資料を手渡されたのだが、その時彼が

「ワタシハ、イラナイ」

とはっきりと日本語で言ったのだ。まさかルワンダ人が日本語を突然話すとは思っていなかったのだろう、職員の方は思わず

「えっ！！！！！！！！何で！？！？！」

と驚いた。驚かせてしまったことに逆に驚いたのかムニヤカジは

「ウソウソ、イルイル、ゴメンネ～～」

と言って資料を受け取り、すっかり私たちと一緒に見学に参加した。その後研修中にも関わらずおなか为空いたのかそのへんに植えてあるトマトを勝手にむしって食べたりと自由奔放な性格のようだ。他のメンバーと共になぜか「ワッセダー、ワセダー（早稲田）」と歌いだしたこともあった。明るくていつもニコニコしているお父さんのような（実際に彼は2児のパパである）存在で私たちを和ませた。

彼には帰国する日までお世話になり、空港まで送ってもらった。帰り際に

「カエルノ、ダメダヨ～～サミシイヨ～～」

と言ってくれた彼には絶対にまた会いたいと思う。愛すべきムニヤカジ、ありがとう。



(小坂)

## **PHOTO ALBUM**



(左：キガリ国際空港に到着 右：なんでも屋さんのようなお店)



(左：市場 右：農村の子どもたち、外国人に興味津々)



(左：ピースコンサートの宣伝 右：結婚式にて、花嫁)



(左：滞在したホテル 右：教室)



(左：コンサート後、はしゃぐメンバー 右：ルワンダ人と酔っぼらう)



(左：サモサ、中身は肉かポテト 右：ルワンダごはん、バナナ、イモ、豆 etc.)

# 会計報告

作成者：松本 万里子

使途		金額 (ルワンダフラン)	
<b>宿泊</b>			
	キガリ St.Paul	16,000	4,000×4 人
	ブタレ Barthos Hotel	220,000	5,000×4 人×11 日
	キガリ Amani Best Lodge	13,000	8,000×2 人+ 5,000×2 人
<b>交通</b>			
	キガリ→ブタレ 長距離バス	10,000	2,500×4 人
	ブタレ→キガリ 長距離バス	10,000	2,500×4 人
	タクシー (キガリ市内)	22,000	
	JICA 訪問	40,000	
	ブタレ⇄ムランビメモリアル バス	30,000	
<b>通信</b>			
	団体携帯チャージ	9,500	
	インターネット	6,300	
<b>ライター</b>		200	
<b>入場料</b>			
	King's Palace	12,000	3,000×4 人
	ギソジジェノサイドメモリアル	6,300	撮影料として
<b>報告会資料</b>			
	バナナカード	2,000	
	クッキー	1,000	
	ルワンダティー	1,500	
	アカバンガ	1,355	
<b>ルワンダ側本会議活動費</b>			
	Renting the room for Peace Concert	150,000	団体予算より支出
	Transport in Kigali	35,000	渡航者支出 43,125×4 人分
	Transport in Butare, Nyanza	10,000	
	Lunch and dinner in Kigali	20,000	
	Banner for Peace Concert	20,000	
	Decoration for Peace Concert	30,000	
	Refreshment in the rehearsals	42,500	
	Communication	15,000	
	合計	<b>723,655</b>	

## おわりに

今回で第9回を迎えた本会議。個人的には、第3回（初日本招致）から関わらせていただき、第4回でルワンダ渡航、第5回の日本招致、そして前回の第8回（日本招致）では事業責任者を務めました。現メンバーの中では、当団体の成長をより身近で感じている1人であると自負しております。

今回の本会議を終えて、考えさせられたことが2点あります。それは、「共有することの重要性」と「学生団体の限界」です。

「共有することの重要性」については、とても当たり前聞こえるかもしれませんが、毎回の本会議前後でこれについての議論はあがり、当団体としての課題でもあります。日本とルワンダという地理的に遠い2国の学生間での情報や意見の共有もさることながら、日本人学生同士やルワンダ人学生同士であっても、疎かになってしまっていることがしばしばあります。ある一つの企画を立案し遂行するまでには、多くの準備や議論が必要であり、1人で全て行うのは不可能です。だからこそ、お互いに情報の共有を促したり、近況の報告をしたり、意見を交換し合うことが必要不可欠になってくるのです。これからも、この意識は忘れてはならないし、より良い活動、より良い団体にしていくために努力していきたい点であると思います。

次に、「学生団体の限界」です。これについても、常につきまとう問題です。学生である以上、当団体の活動以外にやること、やるべきことはたくさんあると共に、入学や卒業含め、人の移り変わりも激しい。その中で、いかに今までの良き伝統を受け継ぎ、さらに成長させていくことが出来るのか、これは非常に難しいことであり常に私自信の課題でありました。しかしながら、今となってはそれほど深く考えていません。というのは、学生団体というのはどんどん変化しても良いと思っています。団体としての理念や大事にしていることさえ把握していれば、活動の幅や方法を変えても何も問題は無いと思うし、変わっていくのが自然であると思います。全く他にやりたいことが出来れば、他団体で活動することも、自分自身で何かすることも出来るでしょうし、学生の強みを大いに発揮し、自分がやりたいことをするのが一番モチベーションもあがり、何より楽しく活動出来ると思います。そのフィールドが当団体であると思ってくれ、一緒に活動しているメンバーとより良い活動をより楽しくやっていたらいいなと思っています。

最後になりましたが、今回の本会議を無事に終えることが出来たのも多くの方々に支えていただいたからこそであると思っています。心より感謝申し上げます。また、これからもどうぞ温かく見守ってくださいますようお願い申し上げます。

日本ルワンダ学生会議 第7代代表  
宮本寛紀

## 日本ルワンダ学生会議 第9回本会議活動報告書

2013年4月22日 第2版発行

発行元 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 公認  
日本ルワンダ学生会議

編集 谷川 琴乃

連絡先 [japan.rwanda@gmail.com](mailto:japan.rwanda@gmail.com)